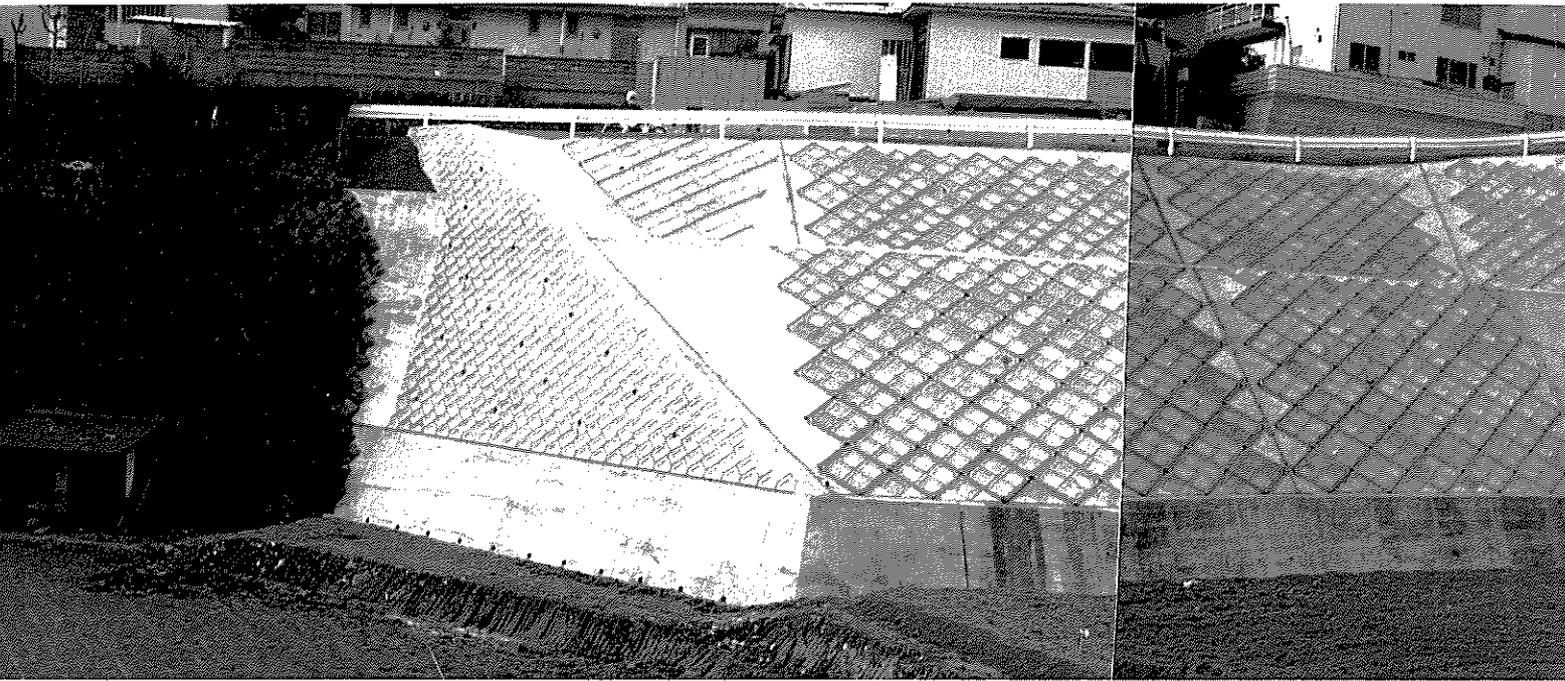


繰り返すまい あの惨禍

7・23長崎大水害復興誌



1985・長崎県長与町

刊行のことば

長与町長 吉田安親

悪夢のような昭和五十七年七月二十三日の長崎大水害から過ぎること三年。県下で、死者・行方不明者二九九人の尊い人命と、被害総額三、〇〇〇億円を超える巨額の大惨禍となり、本町においても、時間降雨一八七ミリというわが国観測史上第一位の驚異的な降水量を記録、六名の人命と、住宅・道路・河川・農地等に九〇億円を超える被害を蒙り、永久に忘れることのできない忌むしい日となりました。

被災後は、各方面から物心両面にわたる救援、救助活動と、国・県の深いご理解ご支援を賜わりましたことは長与町復興への力強い躍動となり、町民各位のご協力も相まって復旧事業も順調に進捗し、ほぼ完了いたしましたことに、心から感謝申しあげます。

今回の災害は、集中豪雨特有の土石流・地すべり・崖崩れ等、かつて経験したことのない土砂災害に直面し、今後の防災対策に多くの教訓と課題を与えてくれました。

私どもは早速、地域防災計画の見直しをはじめ、危険箇所 の把握、土石流警報システムの設置情報の伝達収集のための防災行政無線の開局、避難体制の確立、防災基金の設置等とあわせて、自主防災組織の結成を促進し、町民一丸となった総合的防災対策も軌道に乗り、恒久的な防災の街づくりに着々と進行しているところです。

ここに、7・23長崎大水害から三年余りを経て、昭和五十八年三月に発行した「一八七ミリの脅威」記録集を基に、その後の復旧状況と防災対策を中心に、長与町災害復興誌を発刊する運びとなりました。

本書は、あの大災害から得た教訓と反省を風化させることなく後世に伝え、再び繰り返すことのないふるさと長与をつくりあげる決意と願いを込めたものであります。

さらに、本年十一月三日には、災害復興三周年を期に、長与町郷土芸能大会を開催できますことは未曾有の大災害に一時、茫然自失の状態から今日の復興に至る町民総力の結集と郷土愛に支えられたものに外ならず、あらためて関係各位に深甚なる敬意を表する次第でございます。

昭和六十年十一月一日

もくじ

刊行のことば 長与町長 吉田安親

カラー写真(被災と復旧).....	2
長与町被災状況図.....	10
グラビア写真(被災と復旧).....	22
7・23長崎大水害復旧工事完了	
1. 応急復旧・救援活動.....	58
2. 災害復旧班を編成、対応.....	58
3. 災害査定と復旧.....	59
復旧と私の備え.....	64
災害に備えて	
1. 長与港で県総合防災訓練.....	68
2. 土石流の予警報装置.....	69
3. 1周年防災講演会.....	69
4. 移動系防災行政無線を設置.....	70
5. 自主防災組織づくり.....	71
6. 防災基金.....	72
7. 日頃の心がけが身を守る.....	72



早急な復旧を一協議中の吉田町長(左から3人目)町災害関係職員ら(58.6.15)

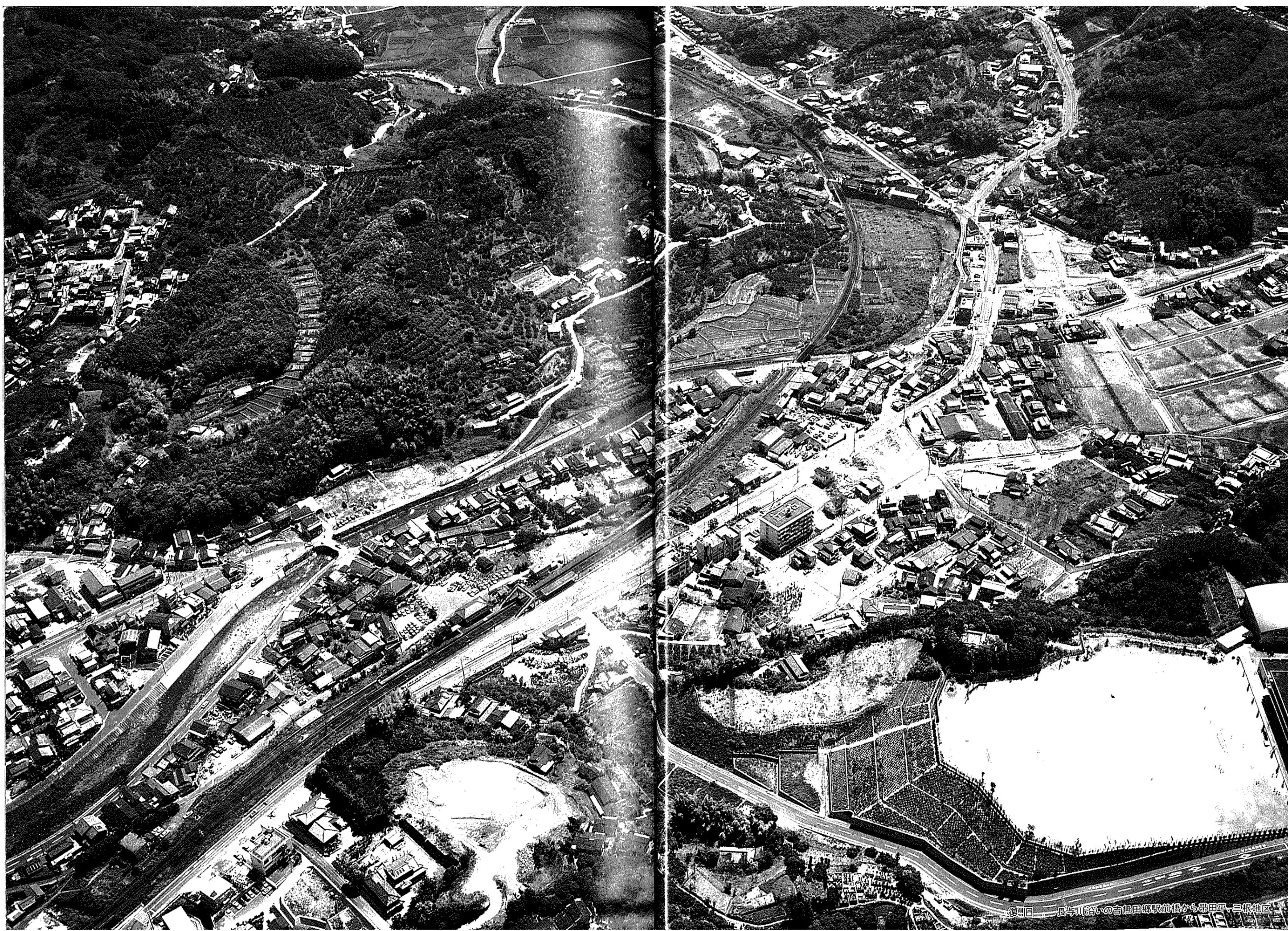
繰り返すまい あの惨禍

7・23長崎大水害復興誌

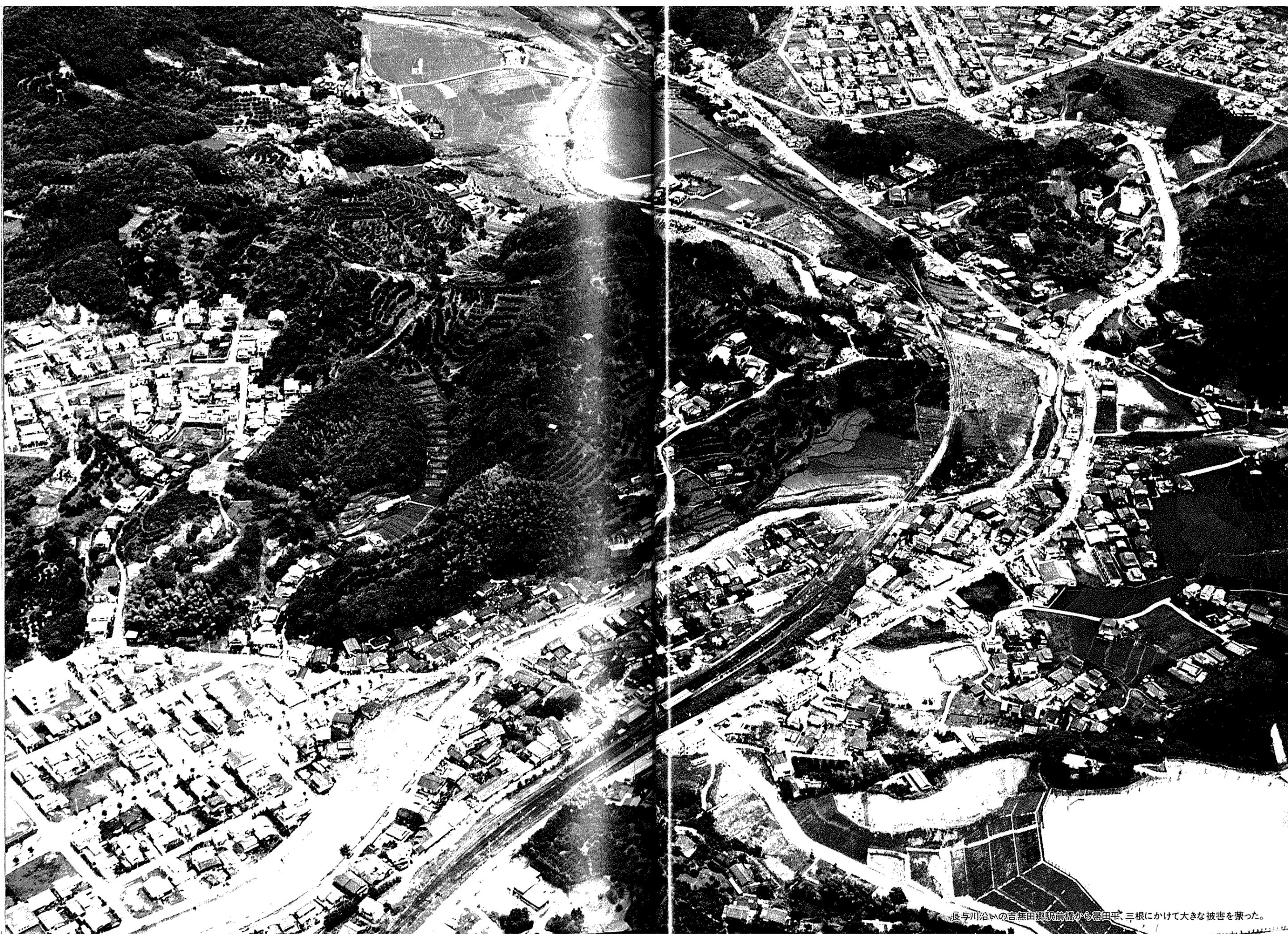


仮設橋を使つての山田橋架替工事 (58. 5. 25)

1985・長崎県長与町



復興回 長与川沿いの吉無田郷駅前橋から帯田平、三根地区



長与川沿いの吉無田郷駅前橋から器田平、三根にかけて大きな被害を蒙った。





山肌を走る土石流と、平木場川が決壊、氾濫して、河川・農地など被害が大きかった平木場地区

7・23長崎大水害 長与町被災状況図



●死亡者

土砂による犠牲者………4人
 水による犠牲者………1(2)人
 計5(6)人

●重軽傷者

重 傷………6人
 軽 傷………9人
 計15人

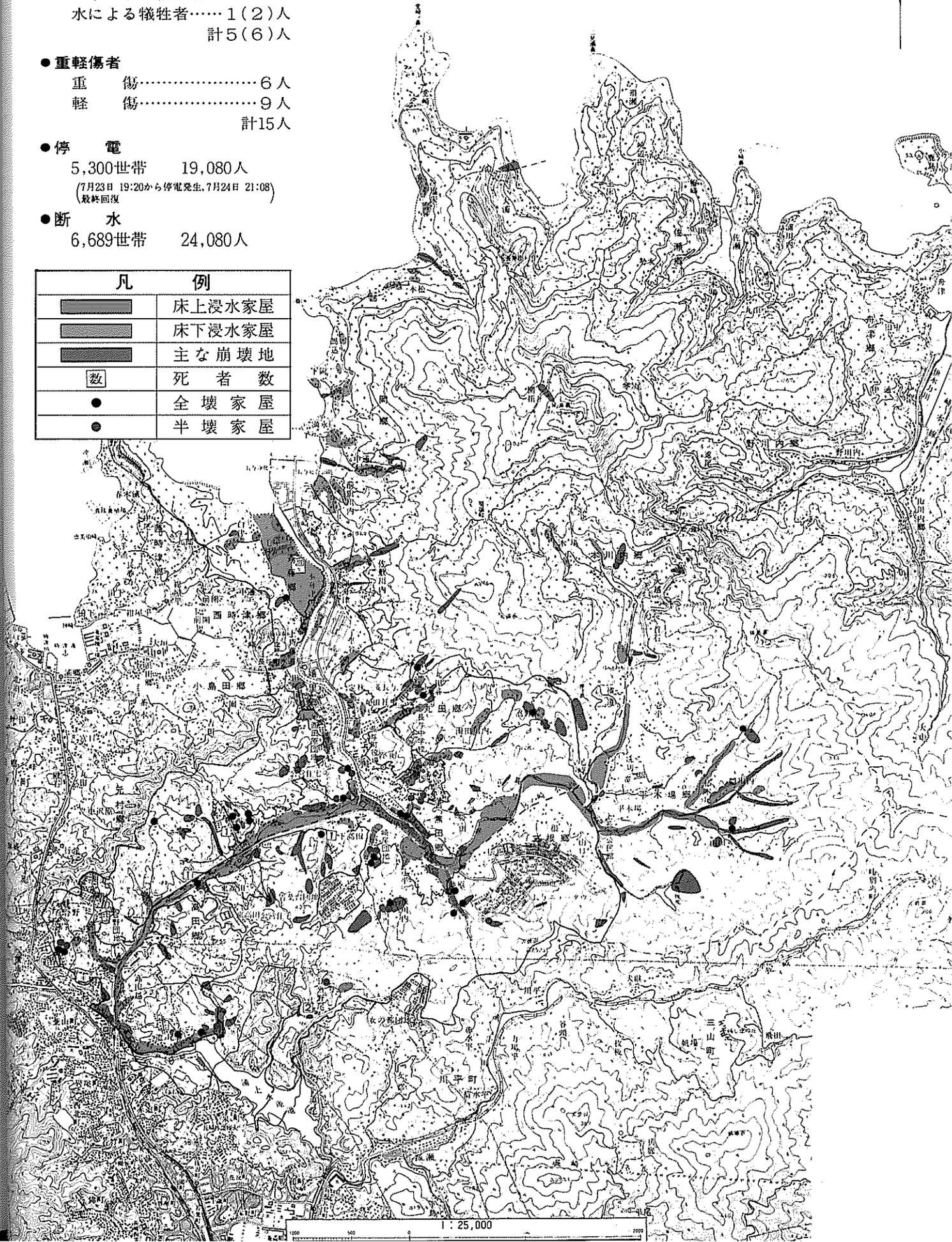
●停 電

5,300世帯 19,080人
 (7月23日 19:20から停電発生,7月24日 21:08)
 最終回復)

●断 水

6,689世帯 24,080人

凡 例	
	床上浸水家屋
	床下浸水家屋
	主な崩壊地
	死者 数
	全壊家屋
	半壊家屋



被災と復旧



復旧



長与川が決壊、2戸流失(吉無田郷駅前橋下流)



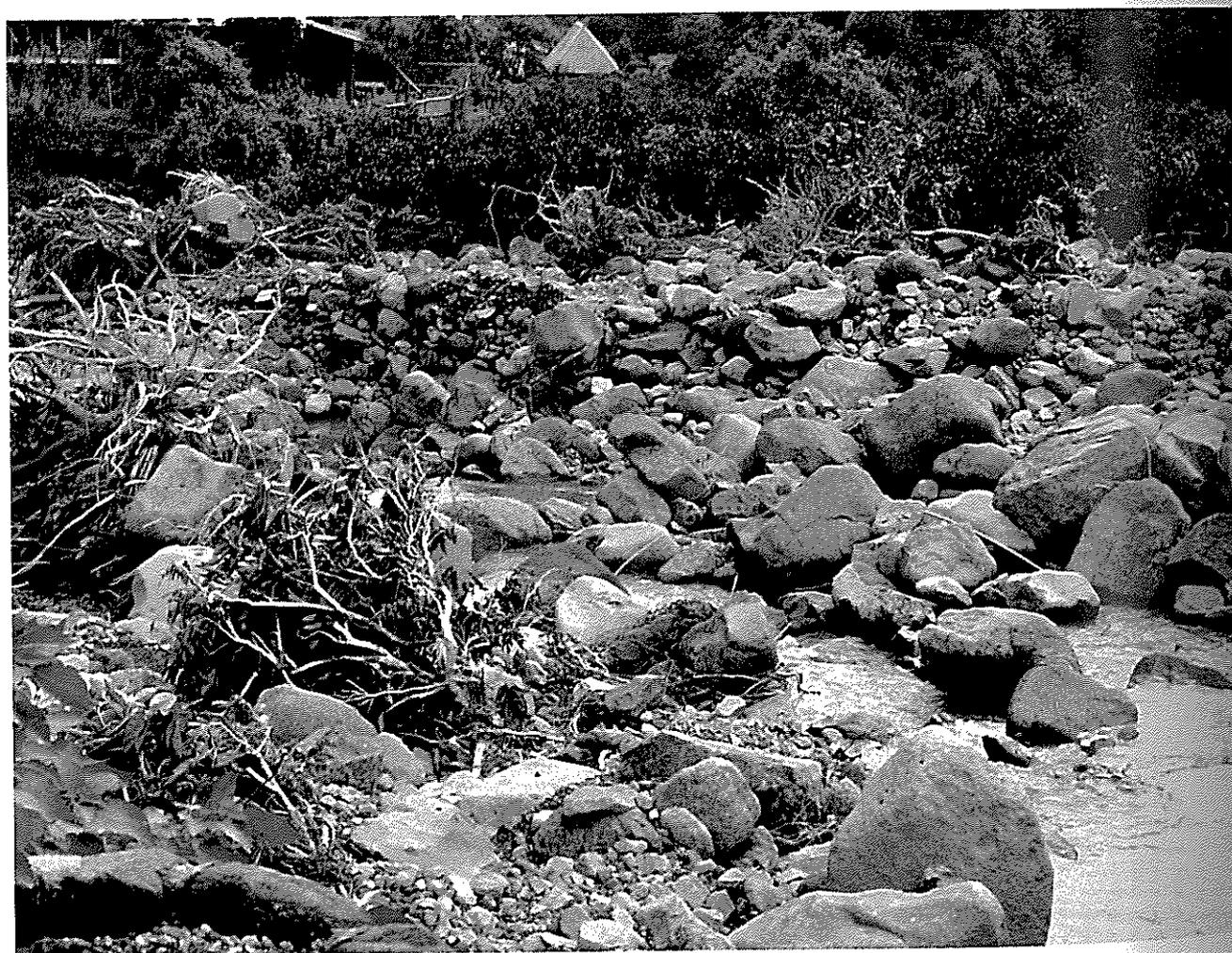
復旧



ものすごい勢いの水が川岸をえぐり取った。(吉無田郷池山・吉無田踏切上流)



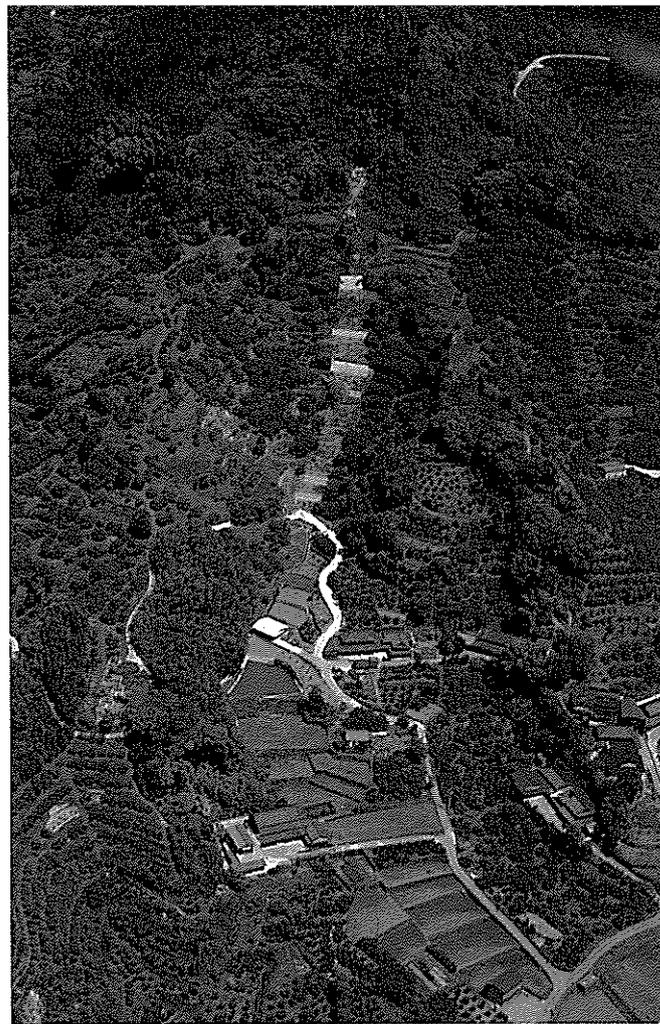
復旧



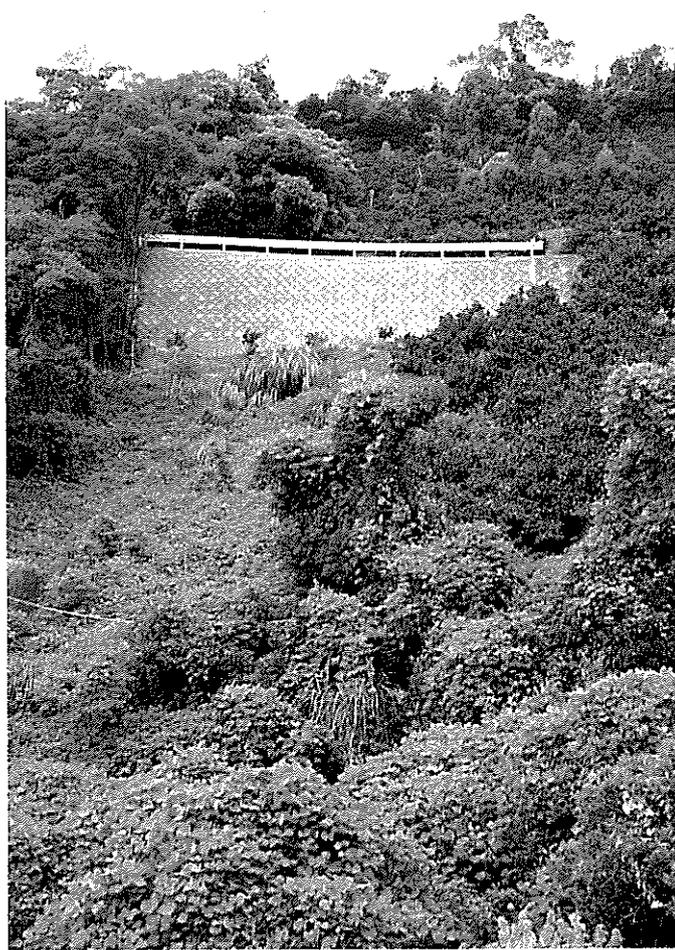
みかん畑は岩山と化した。この上では電柱がへし曲げられ車数台が流された。(平木場郷枯木尾)



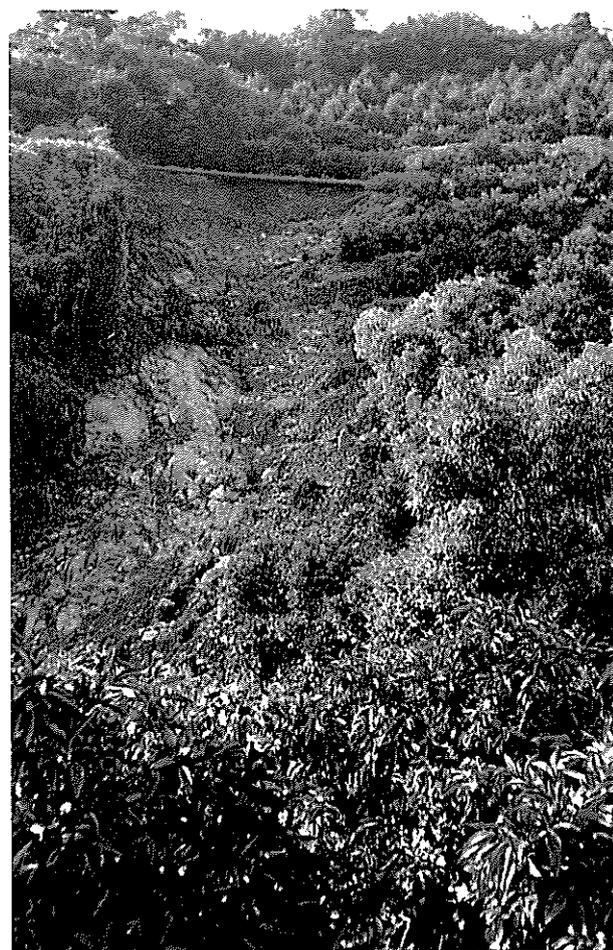
爪あとも生々しい土石流(本川内郷横平)



復旧



復旧



道路下が大きく崩れた。(岡郷町道満永一本松線)



復旧



多良見町に通じる国道207号線は堂崎で寸断された。



復旧



大量の石や土砂が流れこんだ水田(平木場郷隠川内)



復旧

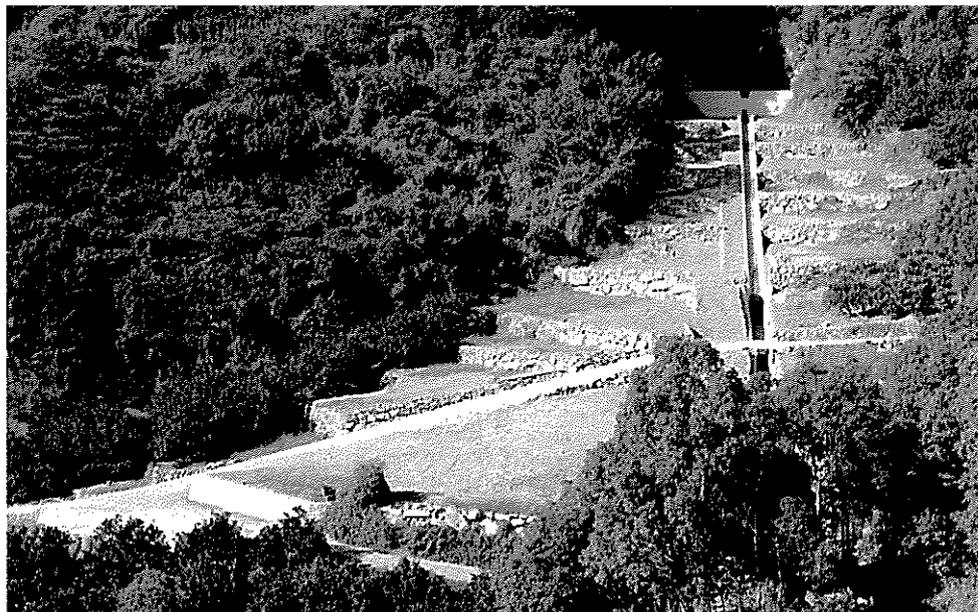


濁流で橋も電柱も車も流失(高田郷東高田)



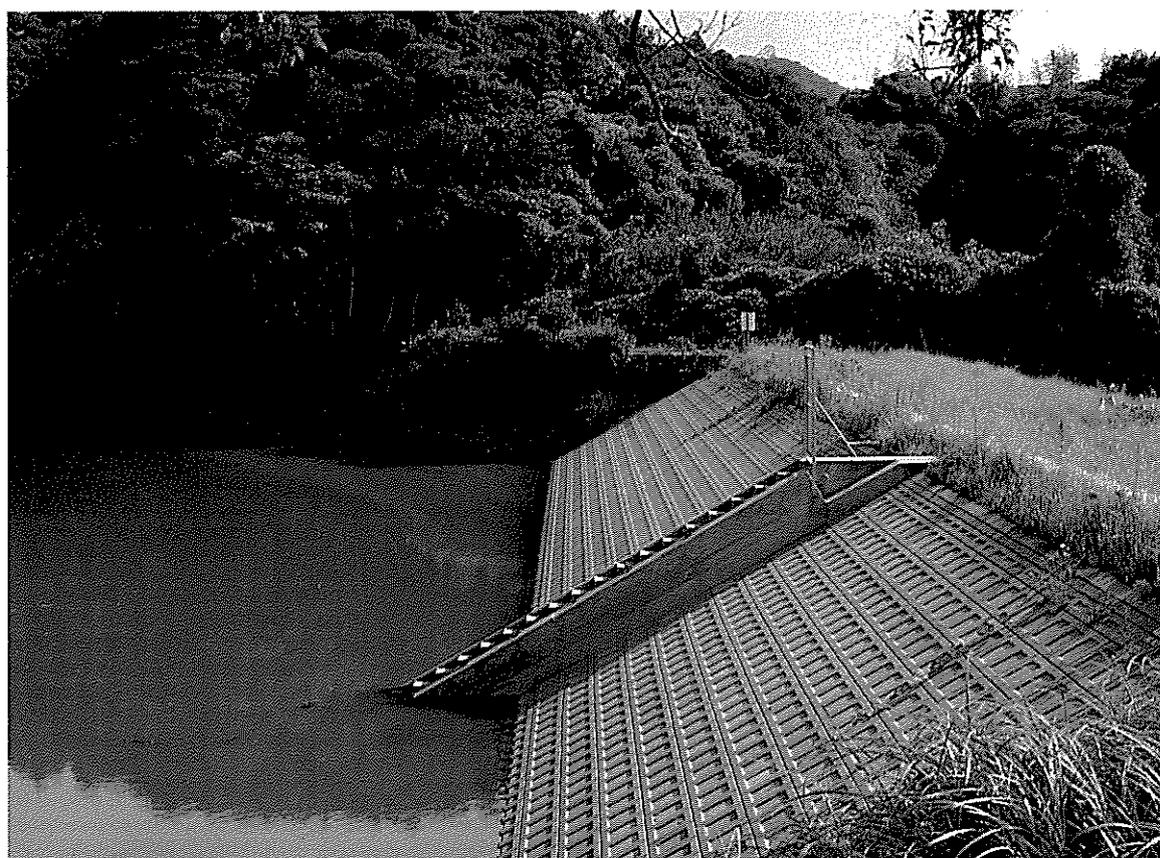
平木場川河川改良復旧工事(隠川内橋下流)

復旧



土石流が走ったみかん畑（岡郷姥懐地区）

復旧（平木場郷、七葉迫）





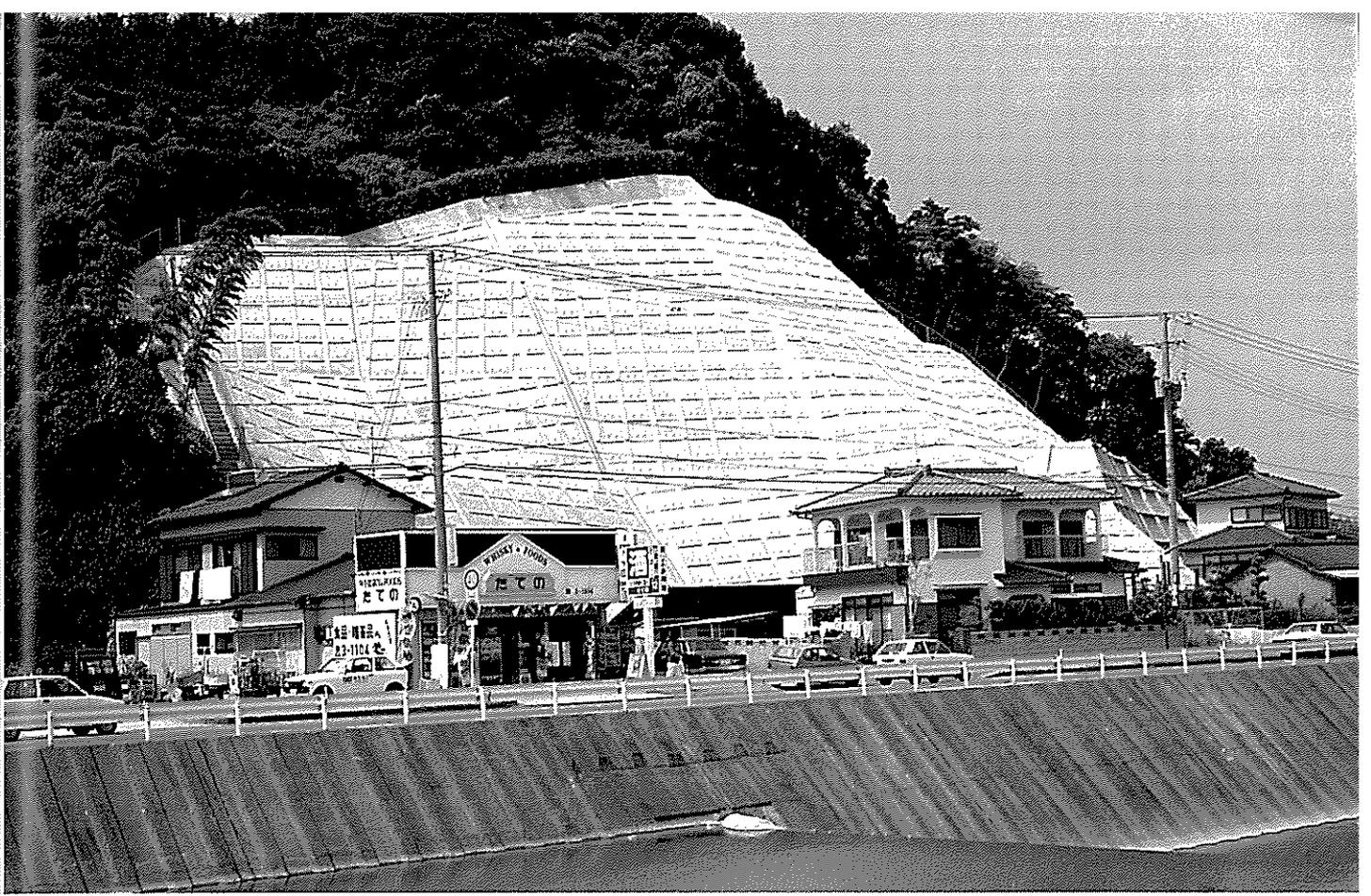
復旧



農地被害(高田郷、西高田)



慶応三年、三九、五三九人の労役で築かれた
平木場郷七葉迫の堤も損壊



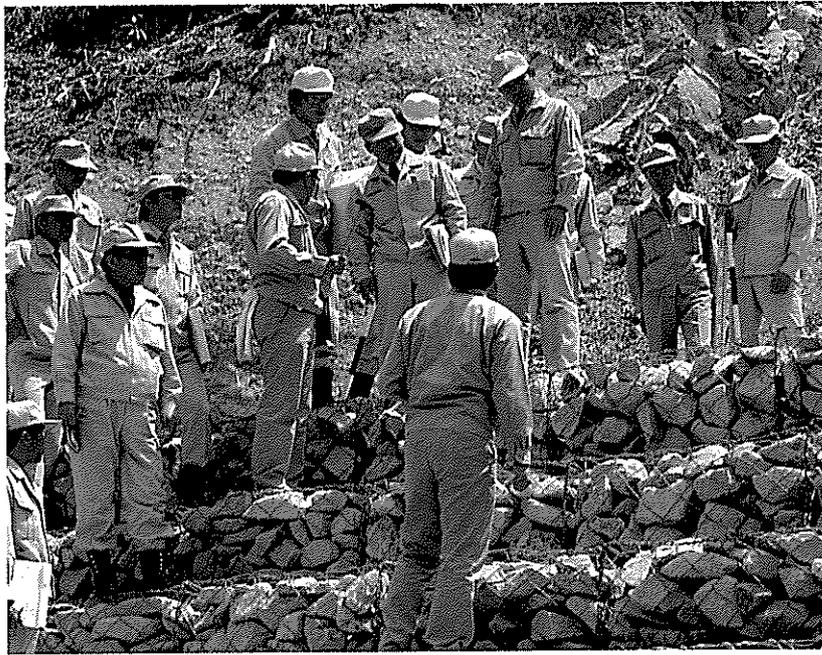
復旧 緊急急傾斜地崩壊対策事業



裏山、竹林が崩れ家屋損壊(嬉里郷皆前)



復旧を急げ——災害現場を視察する吉田町長
 (右から3人目)ほか、町消防団災害関係町職
 員ら(58・6・15)



災害復旧工事カ所、国の会計検査
 (59・4・27 三根郷藤の棟堤)



辻後自主防災組織災害訓練
 (60・5・19)



復旧

本川内



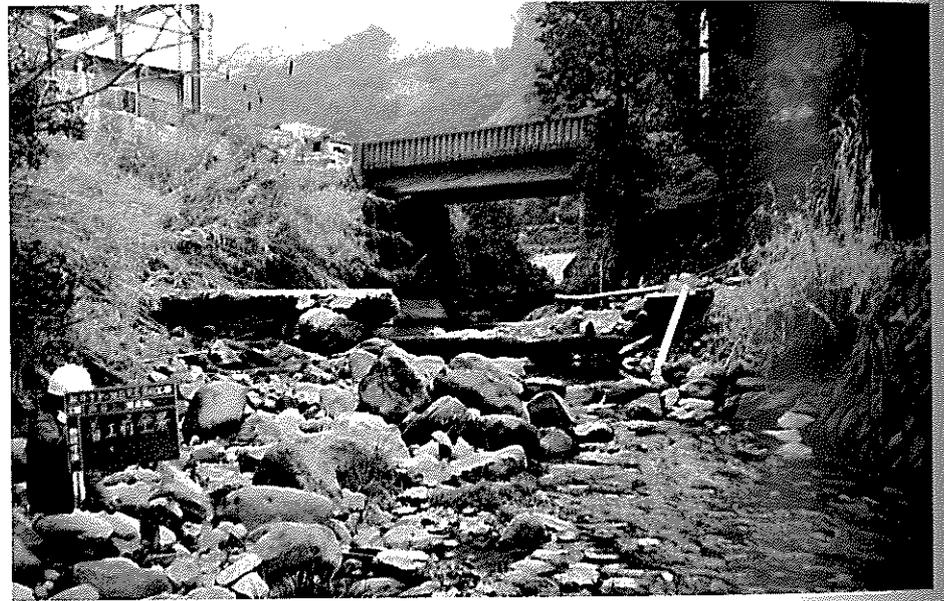
濁流で道路がえぐられ川岸が決壊
(本川内駅前)



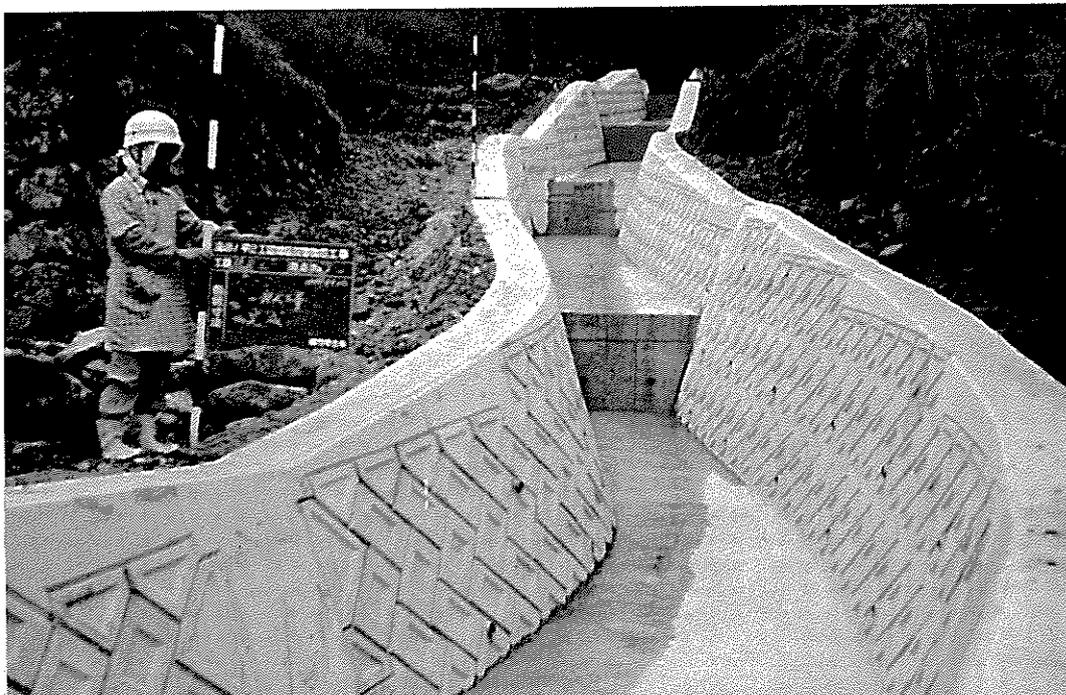
復旧 町道本川内佐敷線(本川内郷木場
多目的研修集会施設前)



復旧



板井手頭首工、流失

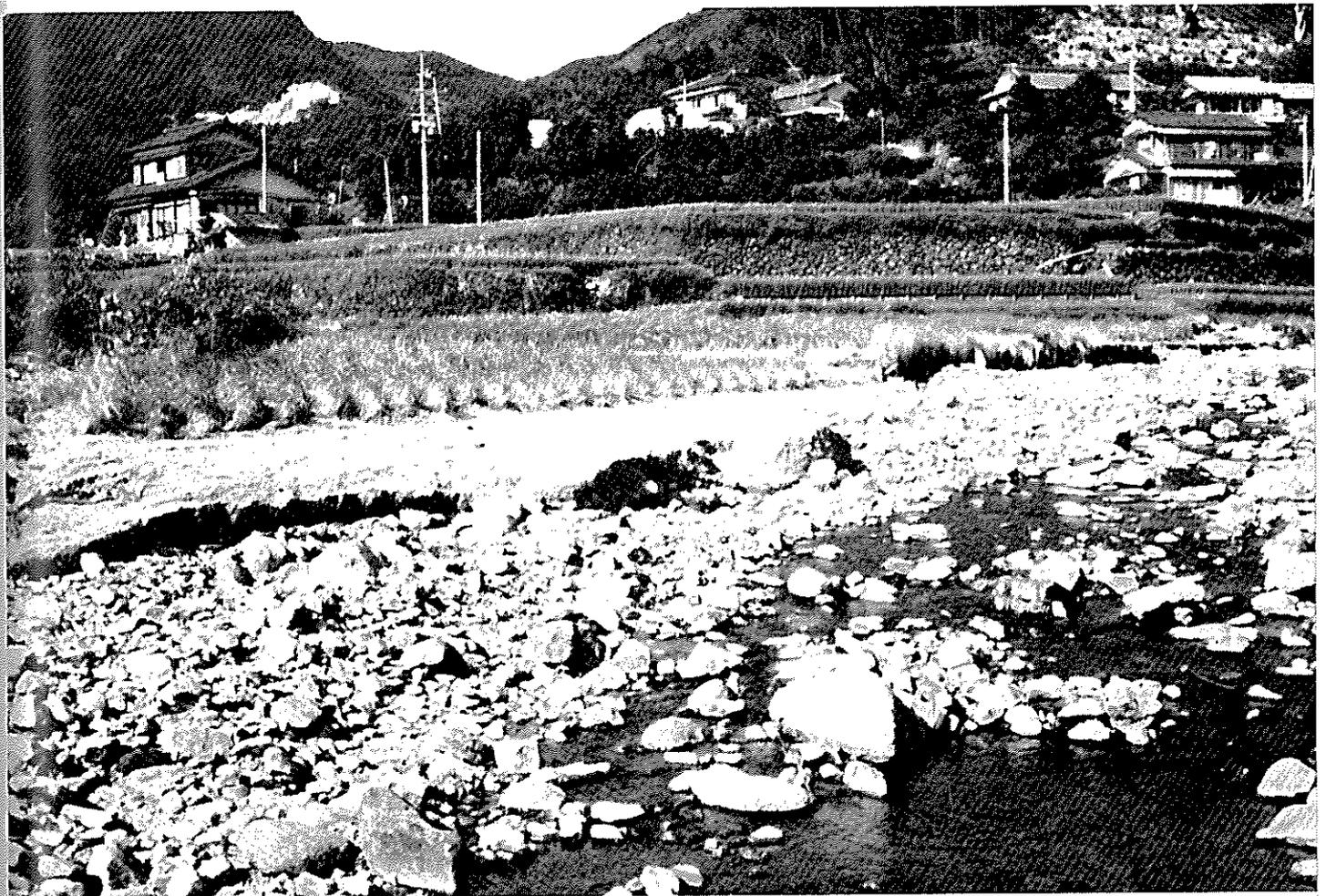


復旧 湯田の平水路

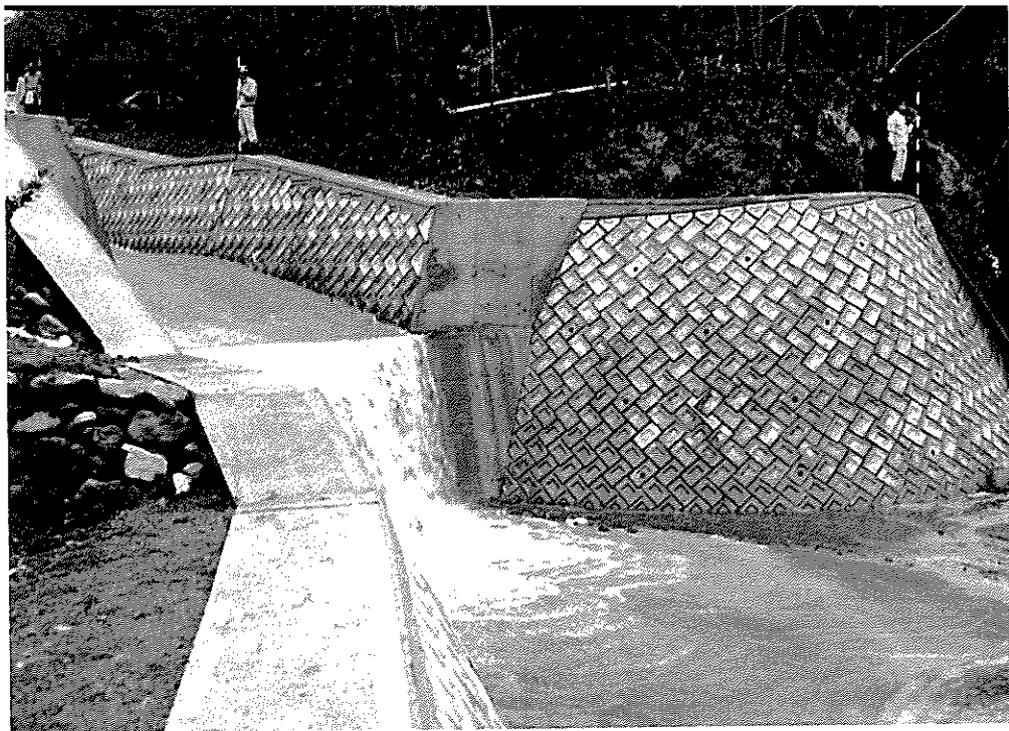
平木場



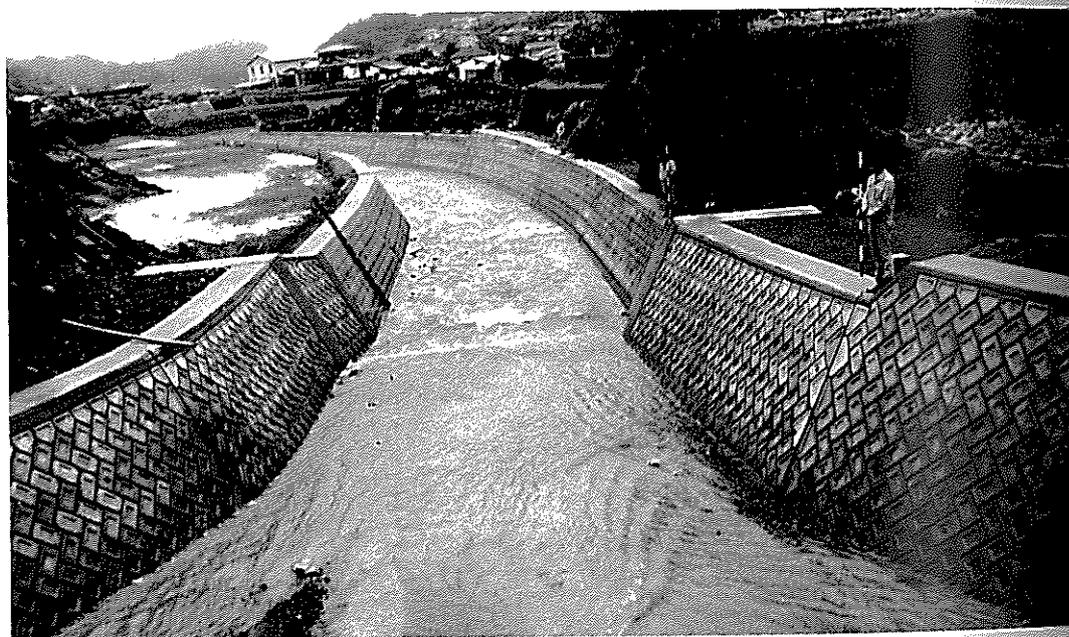
復旧



川岸がえぐられ水田は岩山と化した。
(平木場川と枯木尾川との合流地点)



復旧 落差工 平木場川、山田川合流点



復旧 上写真位置から下流を望む(平木場川)



復旧 上写真より下流(平木場川)



架け替えられた山田橋



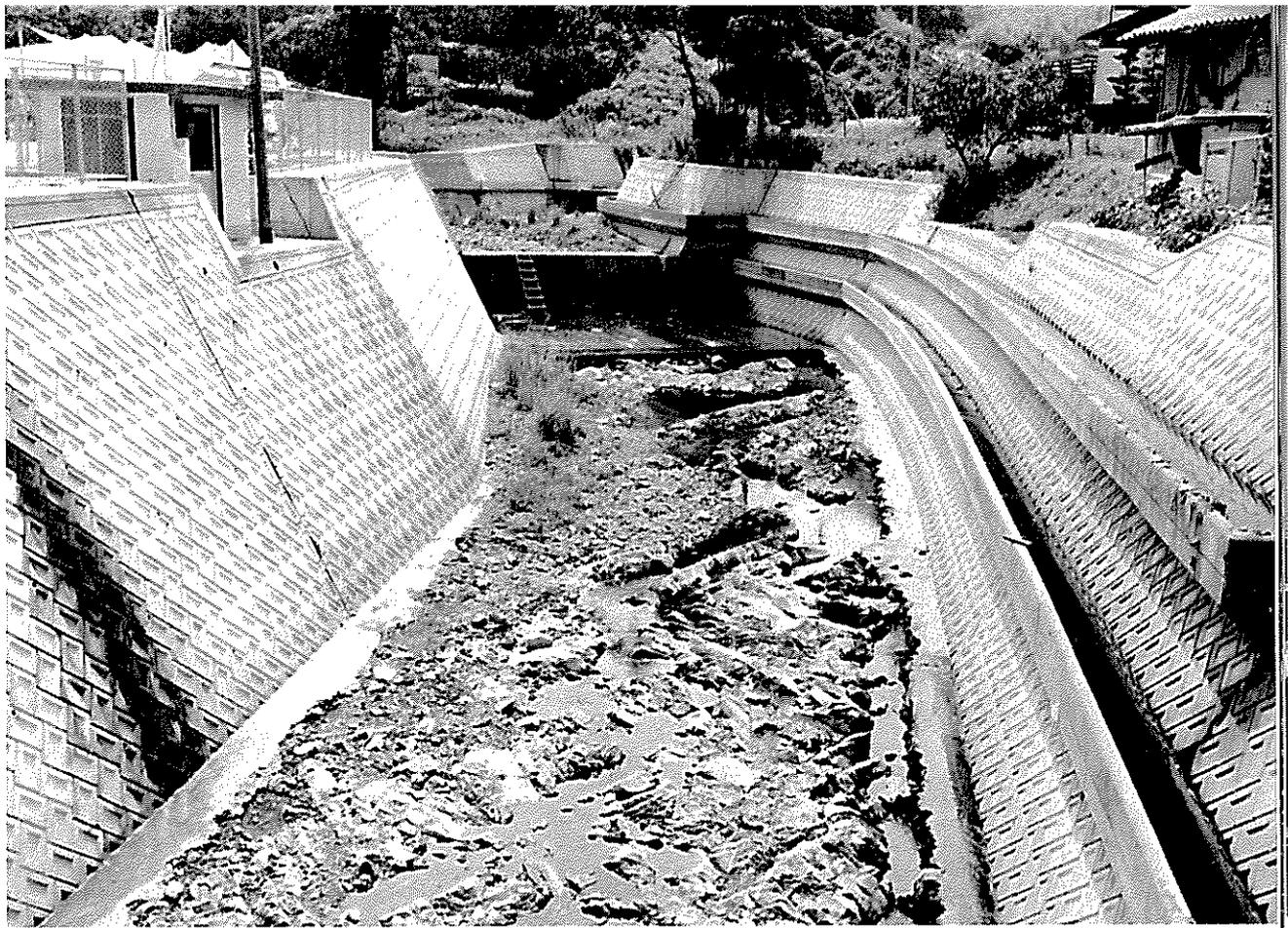
山田橋も損壊



架け替えられた洗切橋



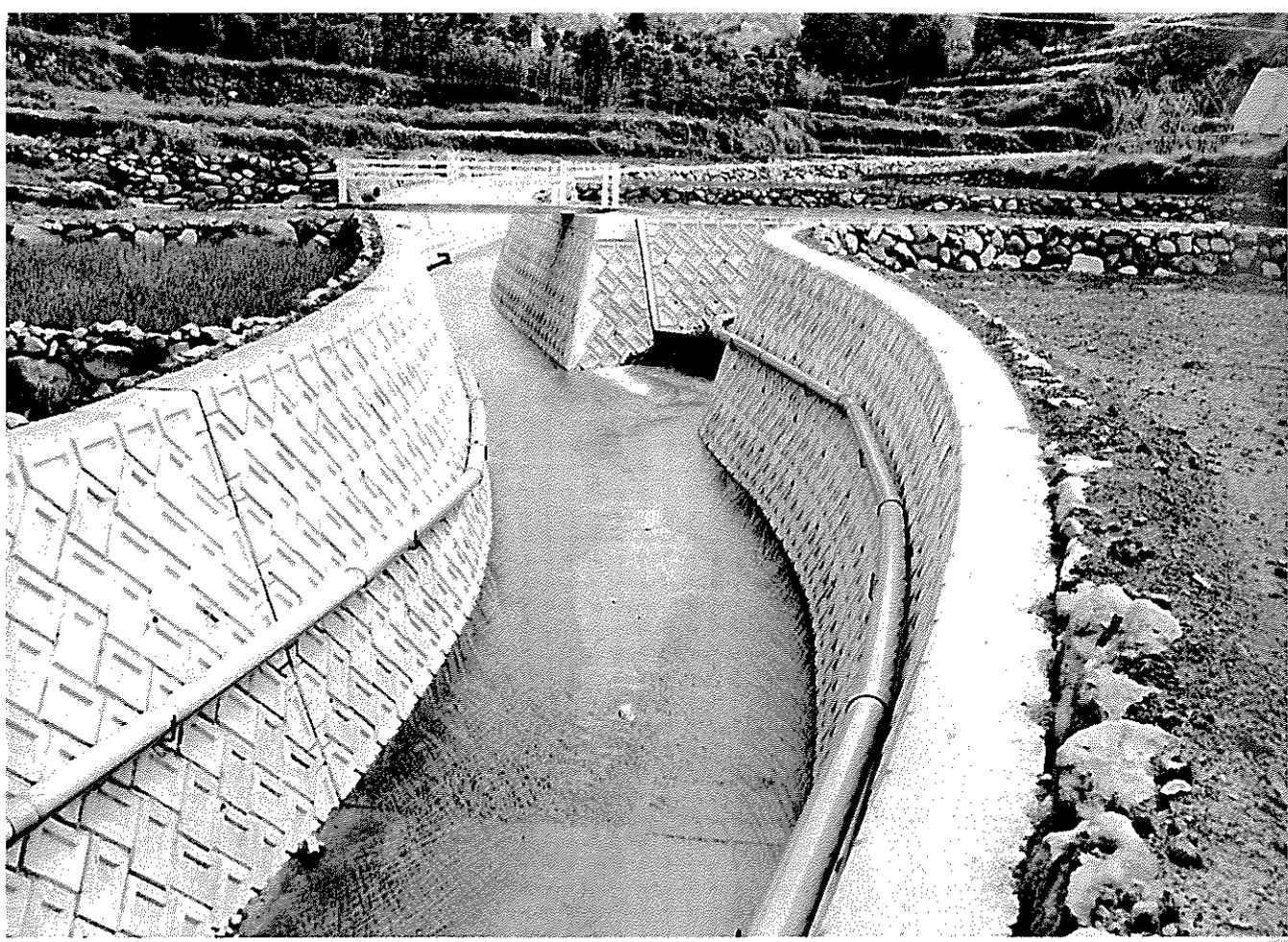
通行不能となった洗切橋



復旧 洗切橋から上流



復旧 洗切橋から下流



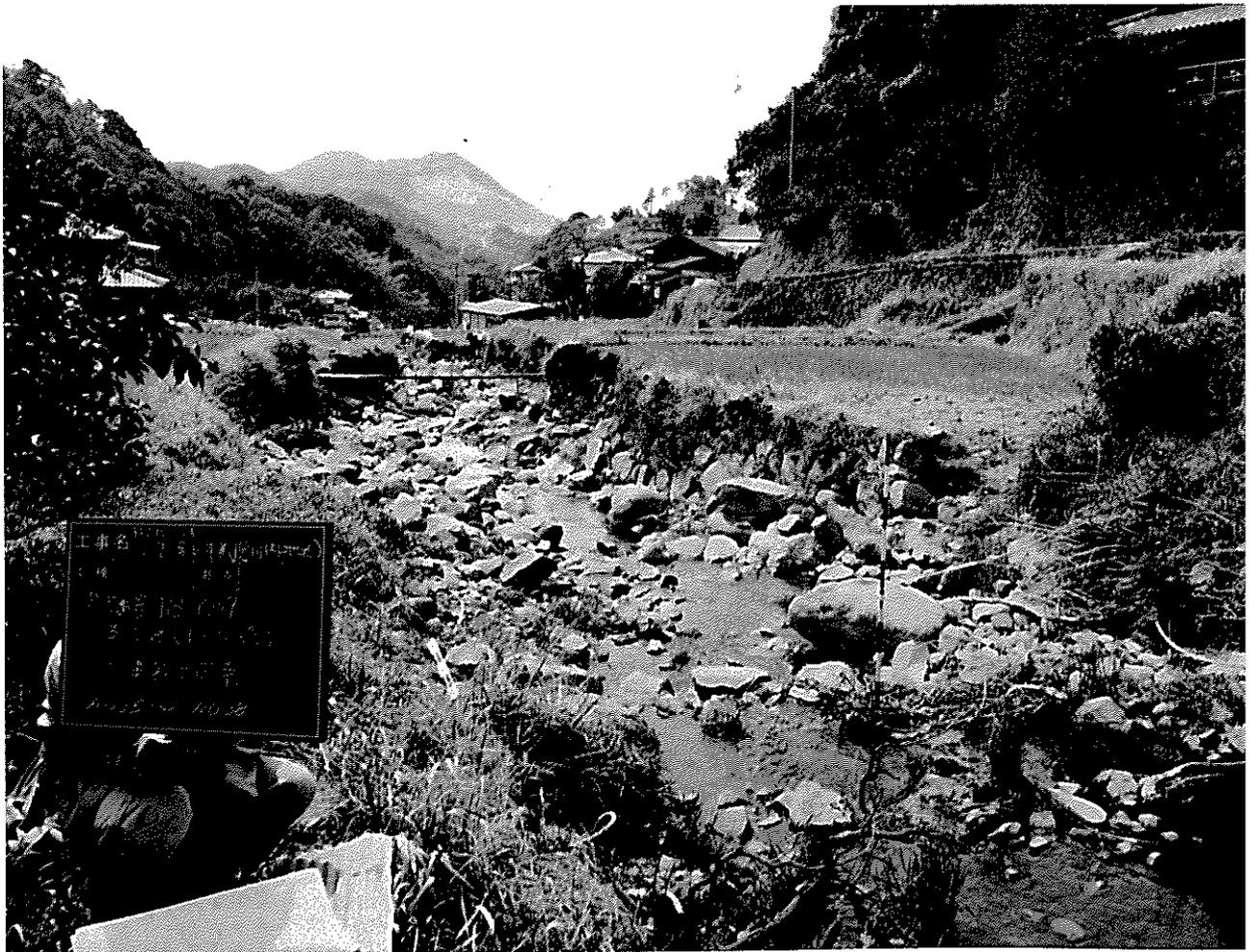
復旧 山田川



濁流で水田は岩山に(山田川)



復旧



激流で水路、水田流失(隠川内川)



水路、農道復旧(隠川内川)



水路、農道復旧(隠川内川)



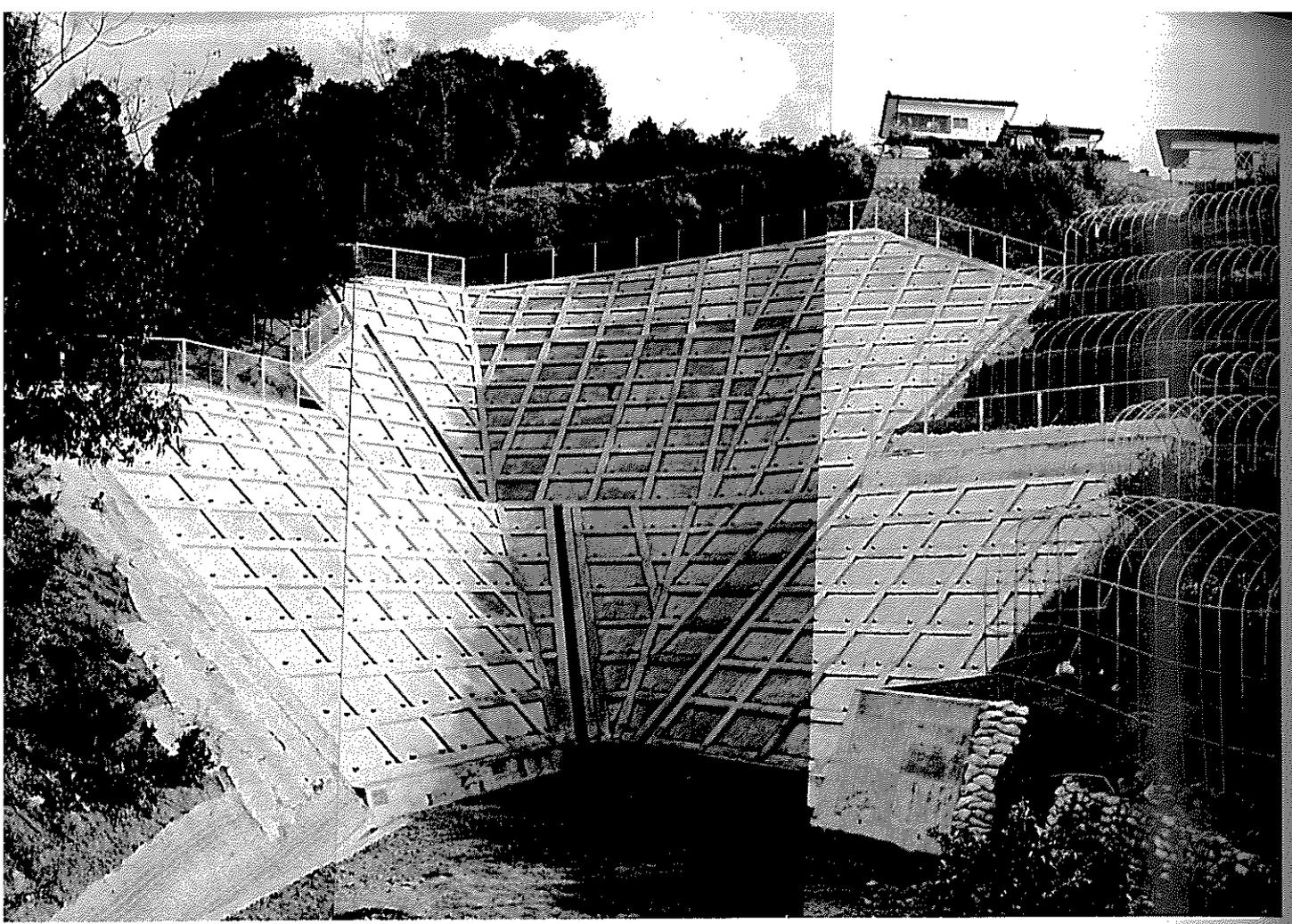
水路は岩山と化した(隠川内川)



復旧



山崩れは家を押つぶし、電柱をへし曲げ、滝のような水は道路を根元から洗った。(枯木尾)

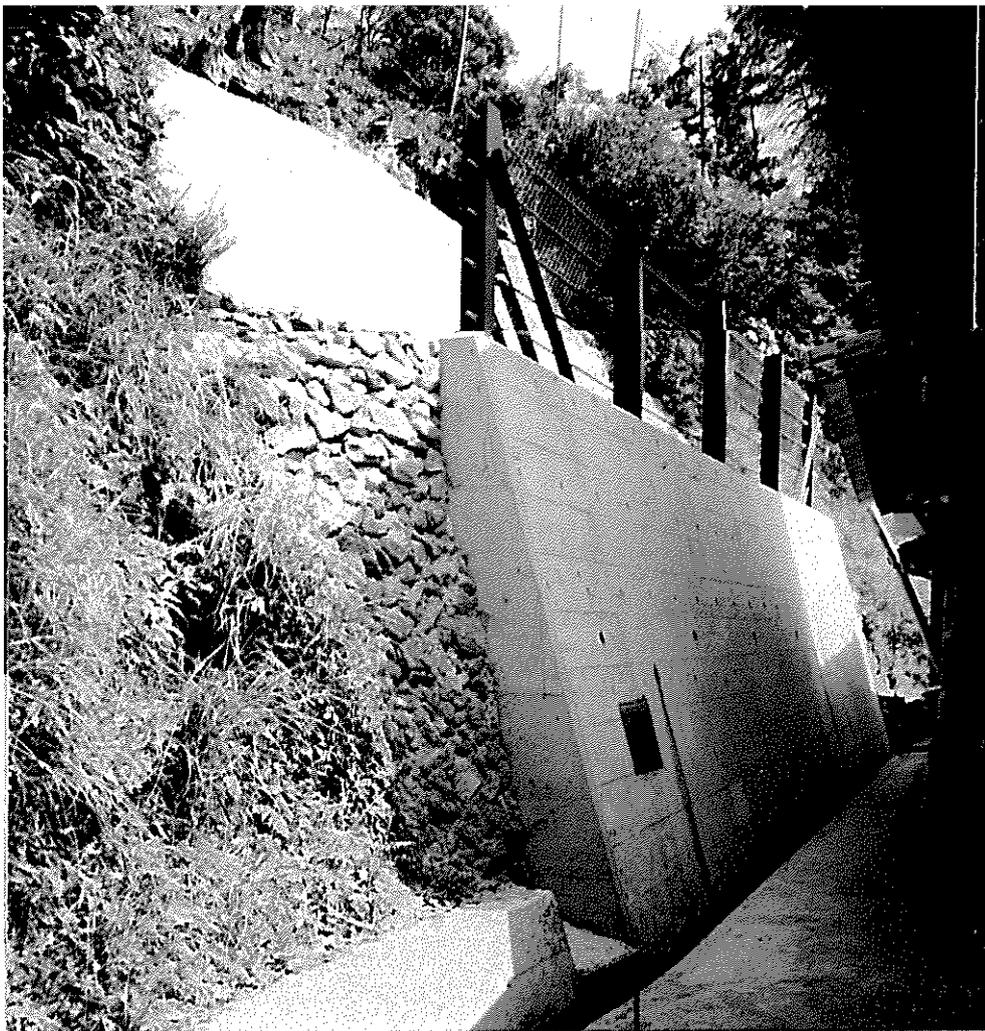


復旧 平木場1地区急傾斜地崩壊対策事業

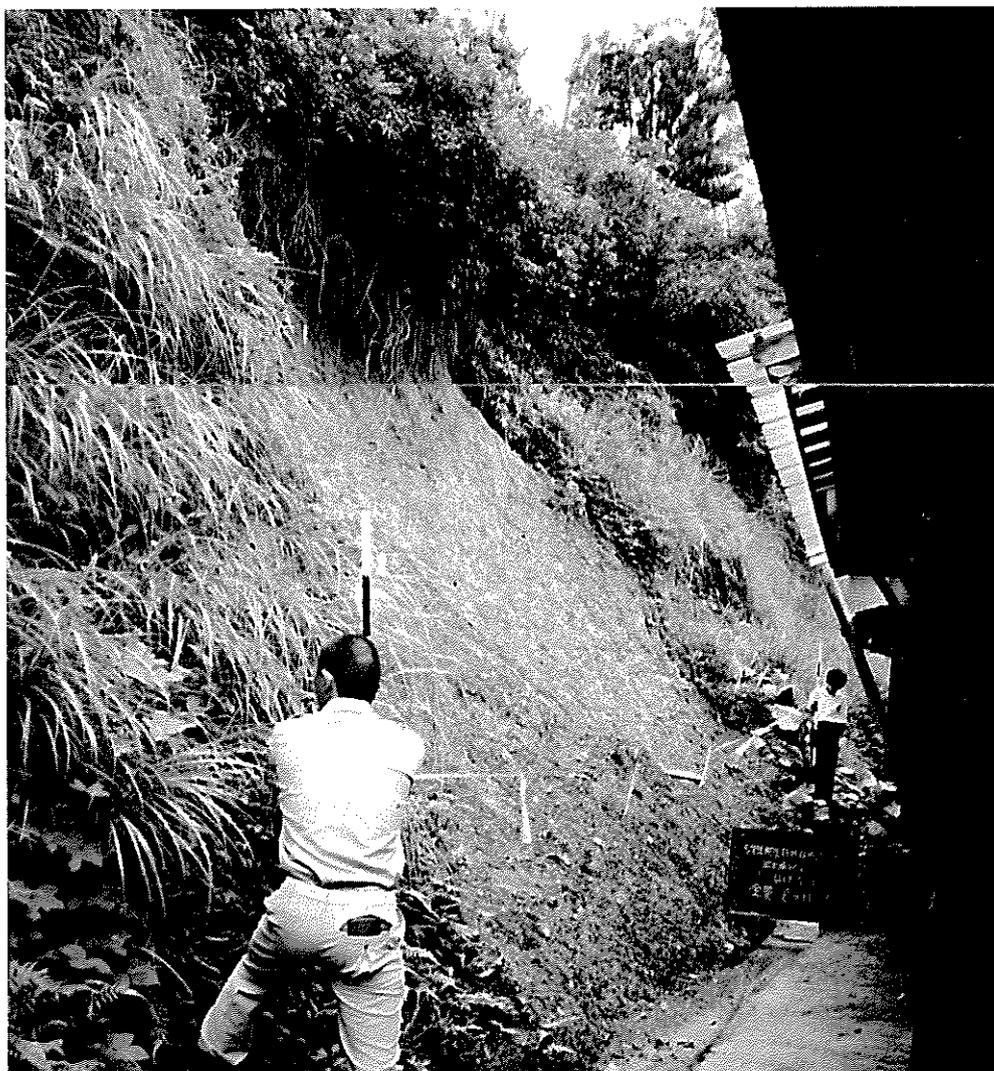


ネットハウス園も損壊（棄迫）

復旧 林地崩壊防止事業



裏山崩壊(下平)





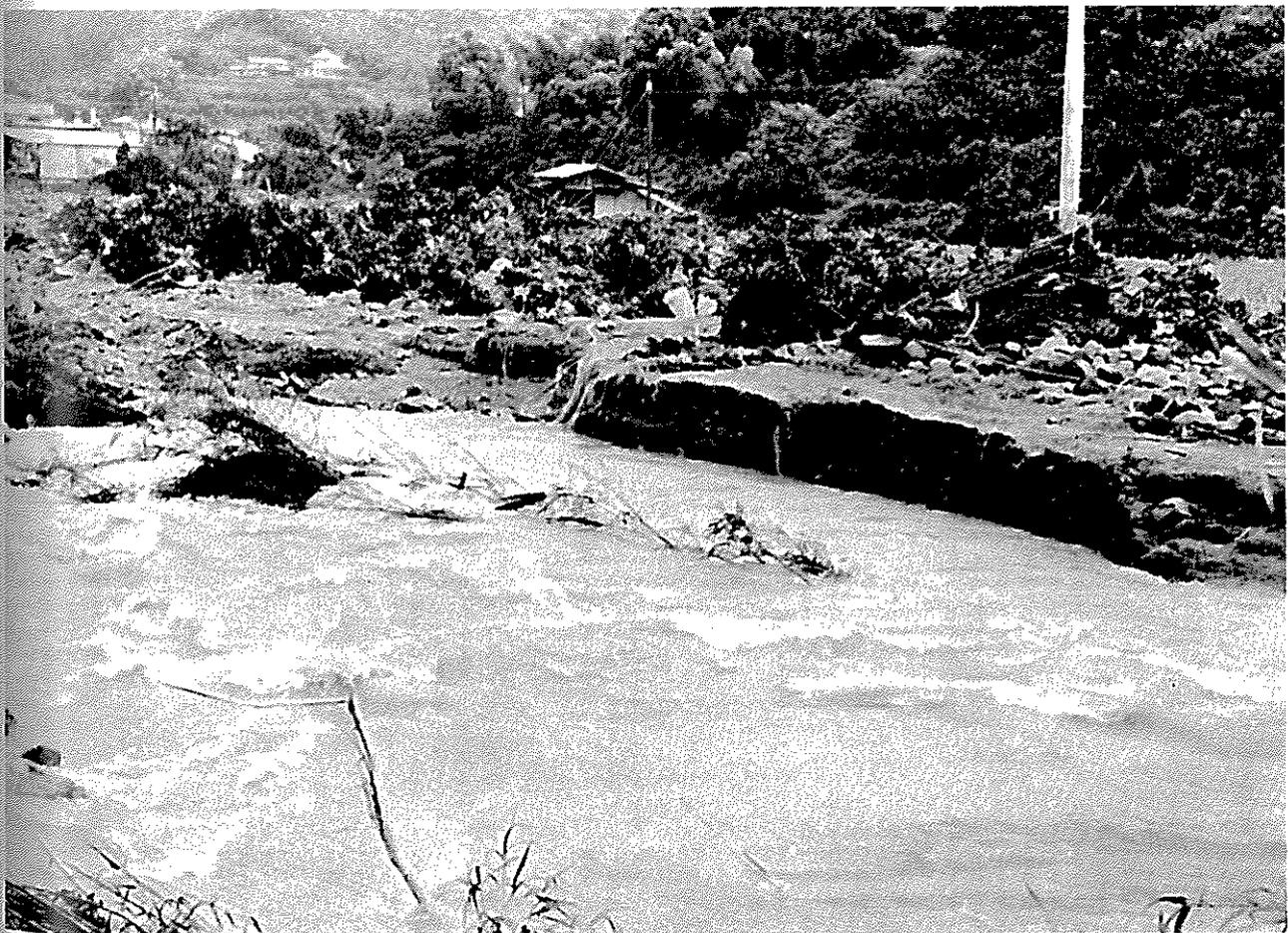
復旧 架け替えられた仮称中洗切橋



洗切小児童の通学道路、町道三根公民館線は舗装が壊れ、石橋(仮称中洗切橋)も損壊



復旧



長与川の決壊、氾濫で被害を蒙ったみかん畑(三反田)



復旧



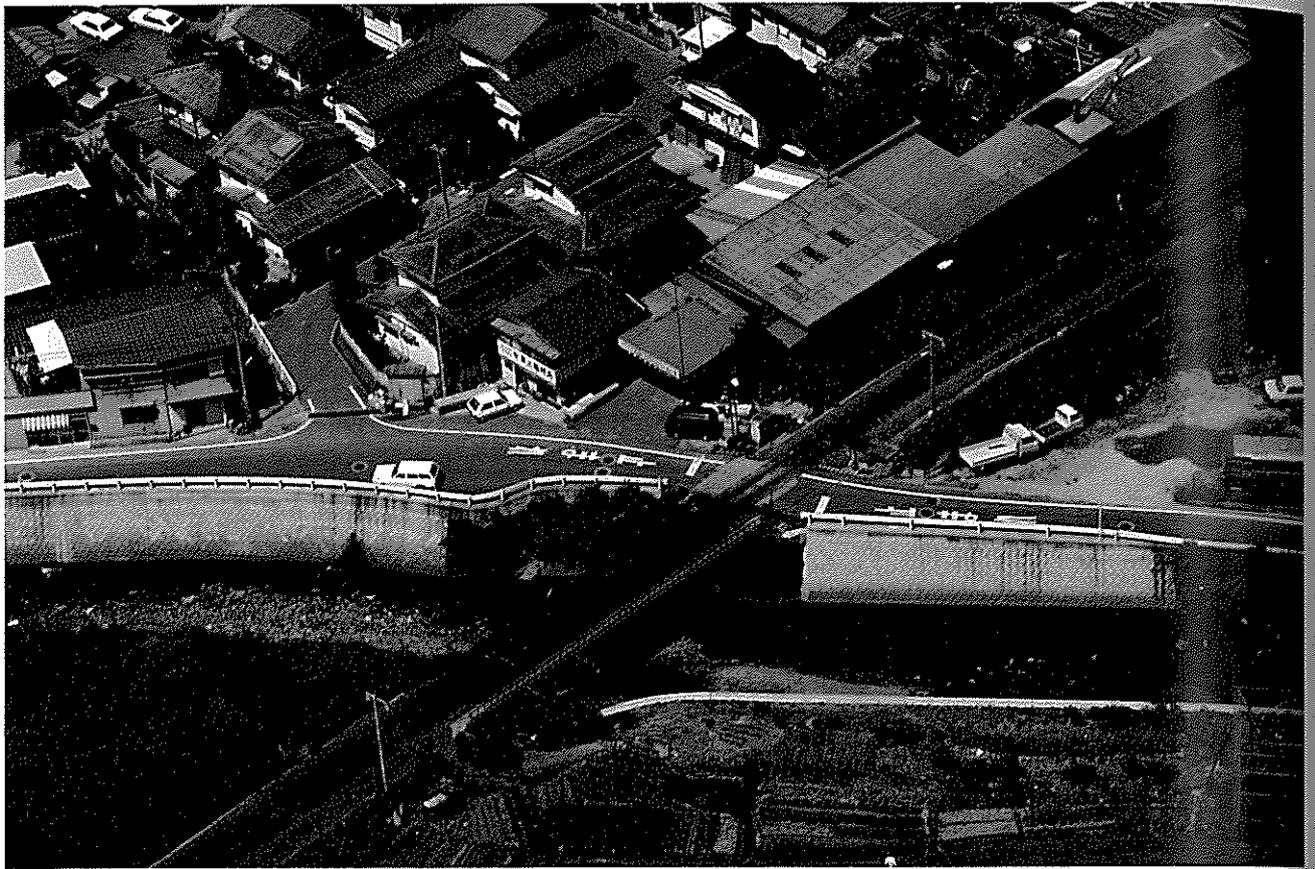
長与川の決壊、氾濫で水田は川原と化した(千石測)



復旧



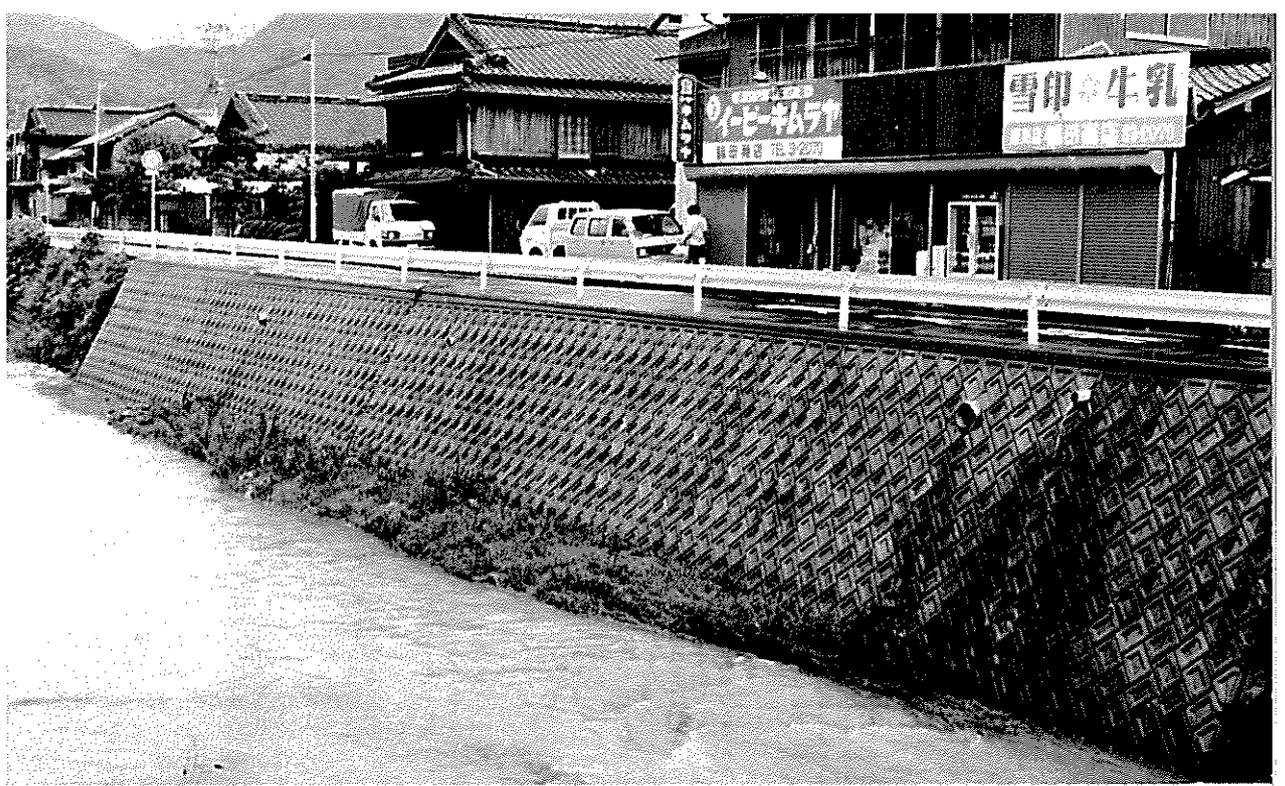
長与川が決壊、家屋流失などの大被害を受けた駅前橋附近



復旧



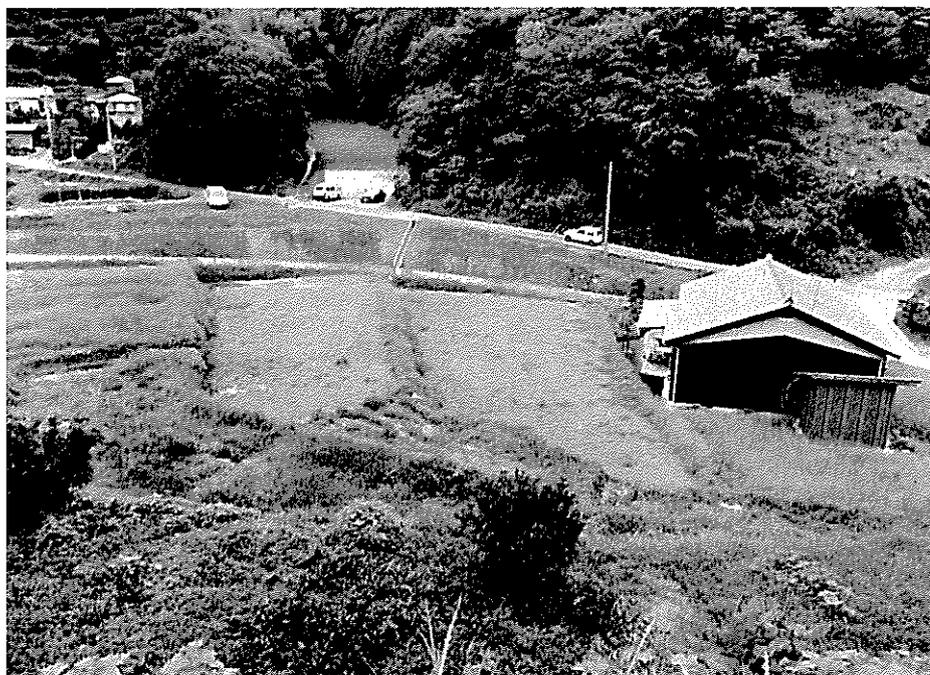
ものすごい勢いの水が川岸をえぐり取り、流木などを運んできた吉無田踏切附近



復旧



道路が大きく崩れ下水管渠が流失(井手本)



復旧(左写真)



復旧



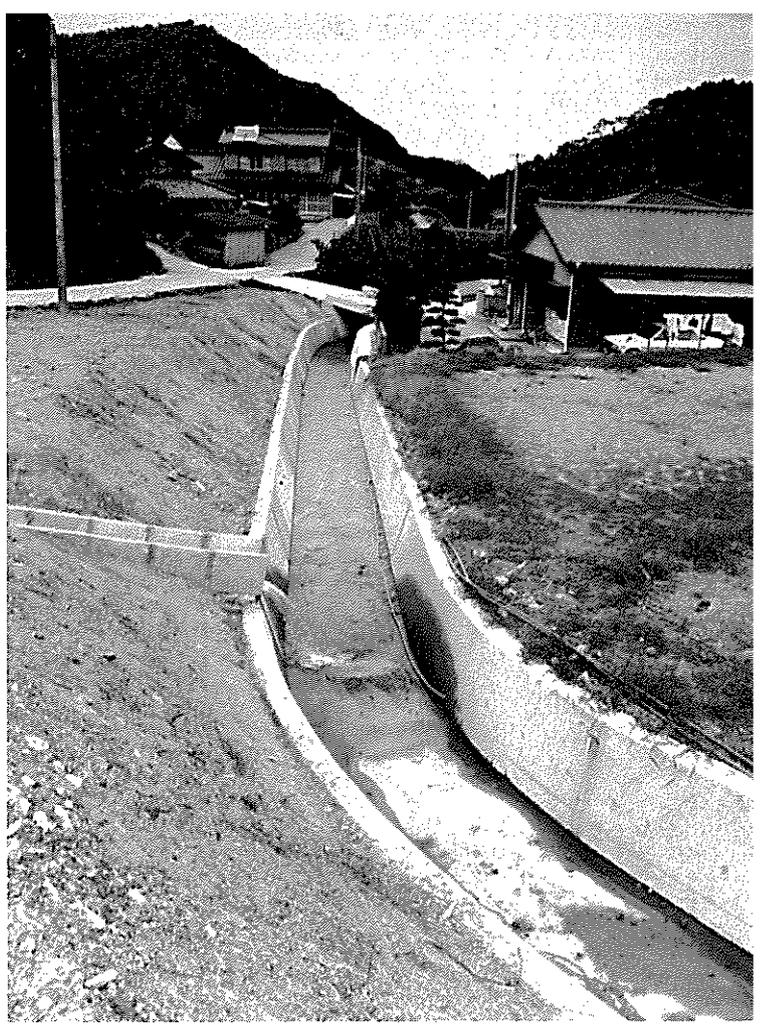
帯田平への道路もえぐられなくなってしまった(内園)



調練場方向からのみかん畑、山林がすべり
大量の土砂、樹木が水田・畑に流出、町道
を閉ざした。(後川内)



土砂流入と激流で水路損壊(後川内)



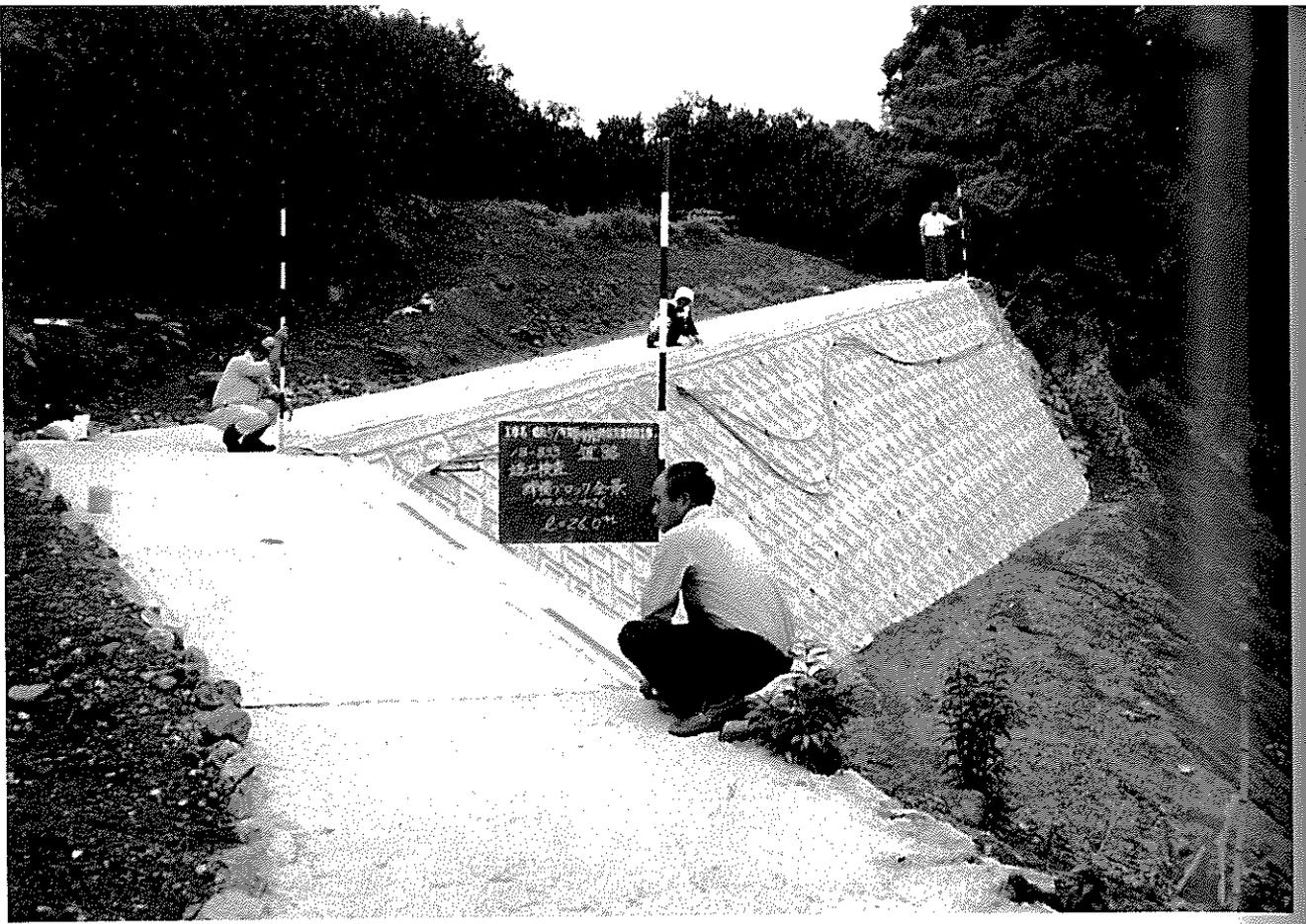
復旧



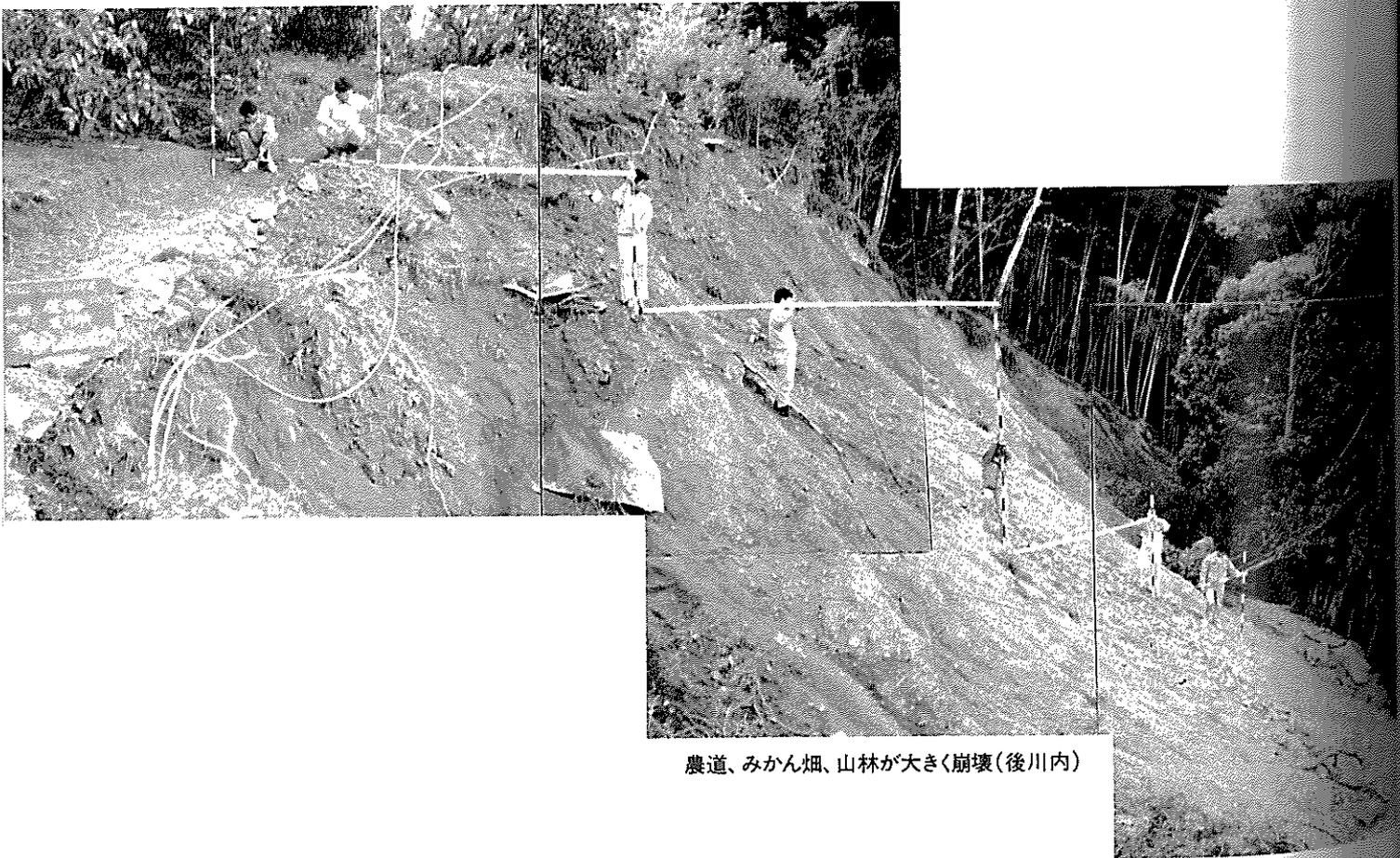
復旧



流失の農地(みかん畑)水路(後川内)



復旧



農道、みかん畑、山林が大きく崩壊(後川内)



農地(みかん畑)クラック(後川内)



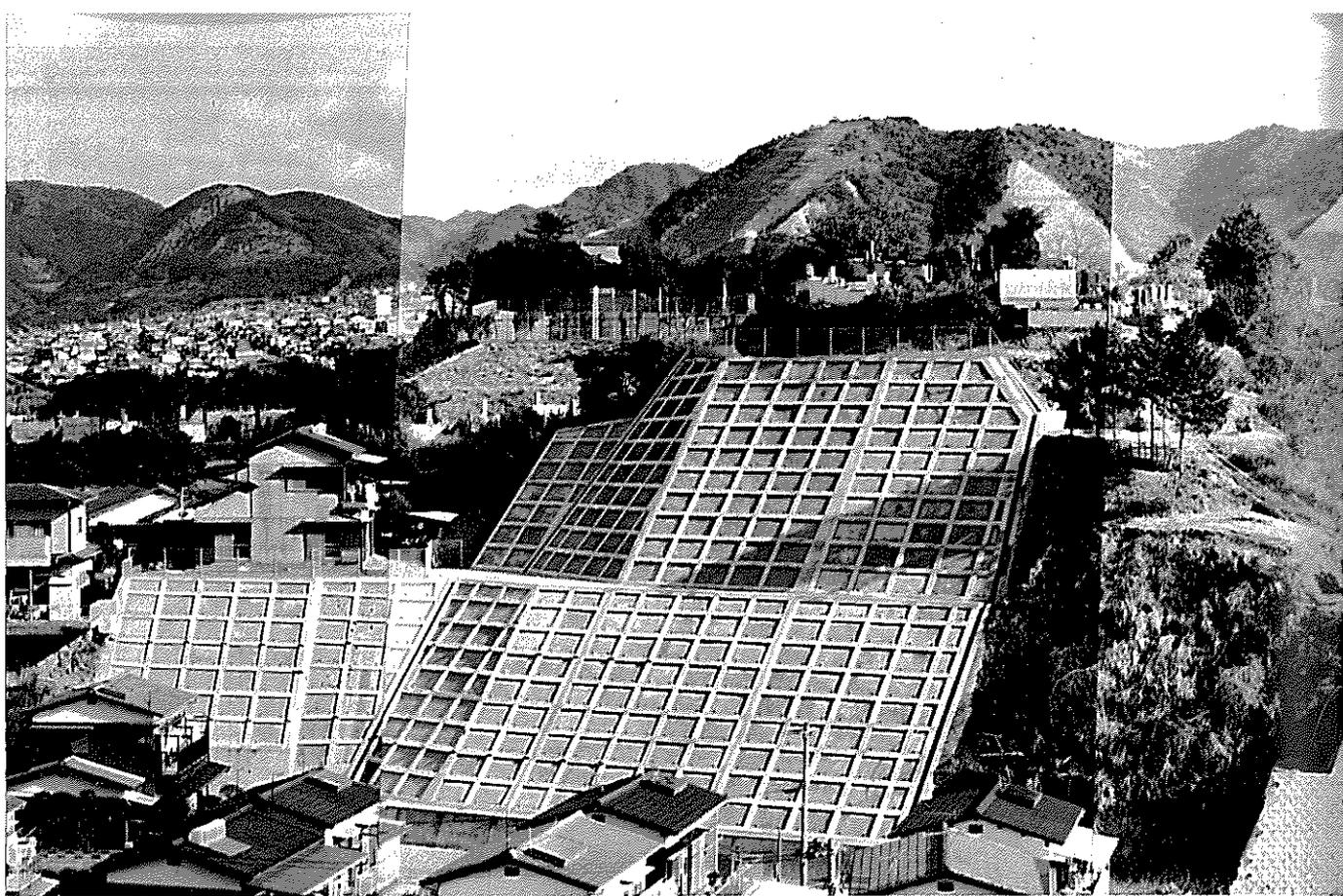
鋼管建込み(後川内)



鋼管モルタル注入(後川内)



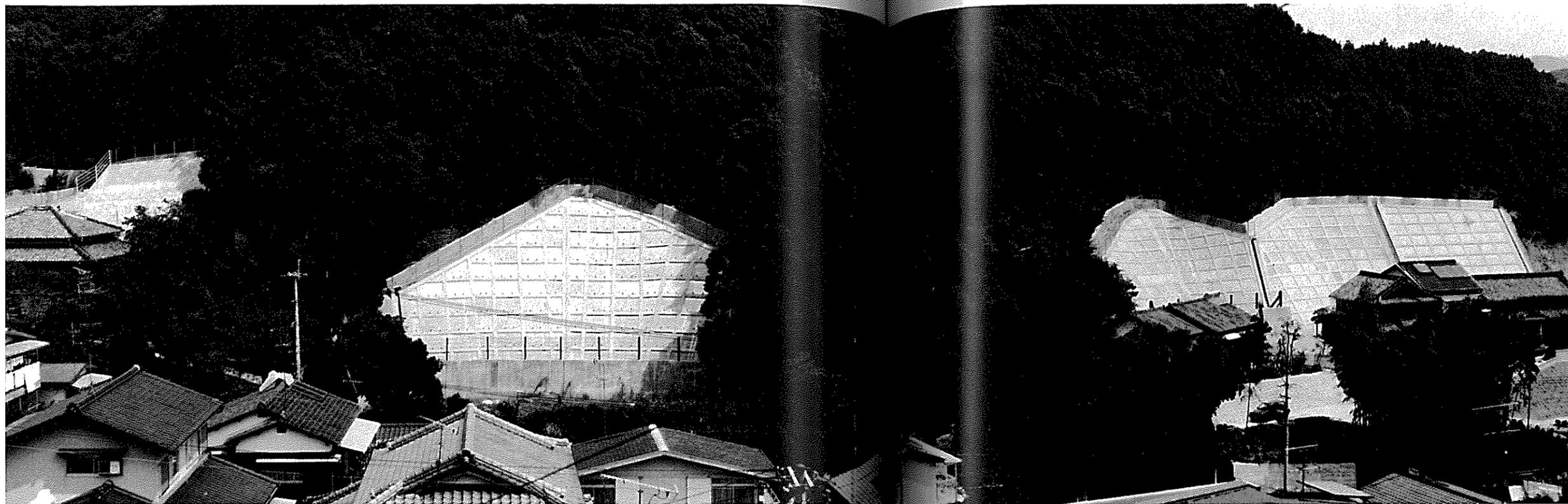
モルタル注入完了(後川内)



復旧 緊急急傾斜地崩壊対策事業



がけ崩れて住家2戸全壊(辻後)



復旧 緊急急傾斜地崩壊対策事業



裏山が崩れ死者も出した西高田地区(和楽団地真向かい)



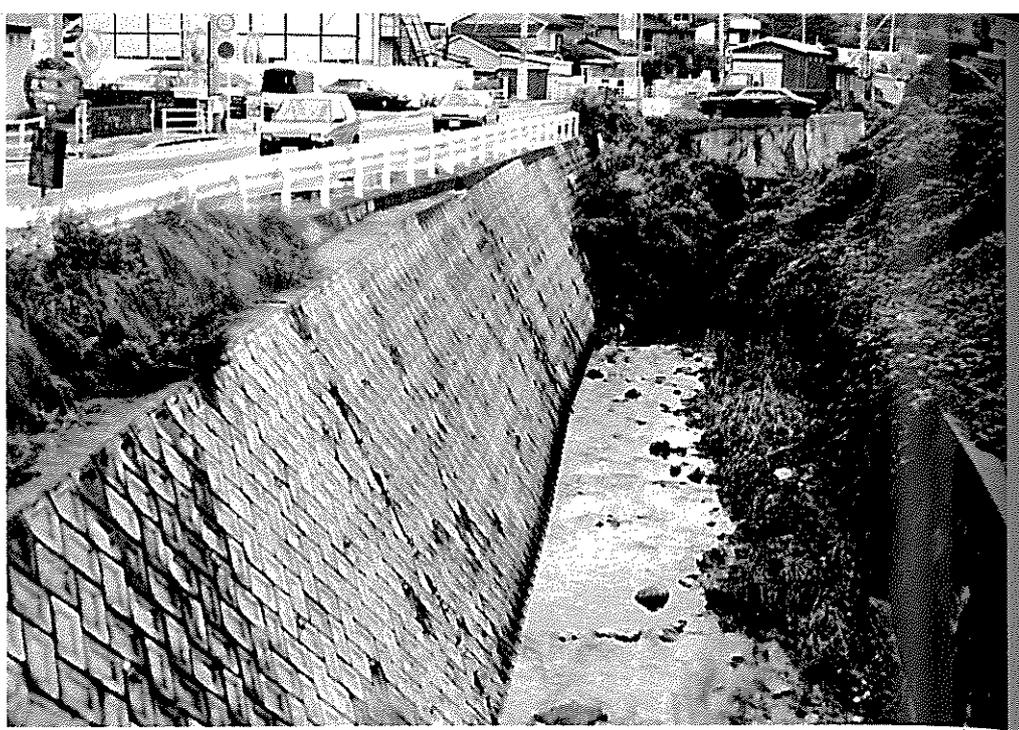
復旧



国鉄線路も道床がえぐられ電柱は宙ぶらり。(本木)



復旧 緊急急傾斜地崩壊対策事業（左写真）



復旧



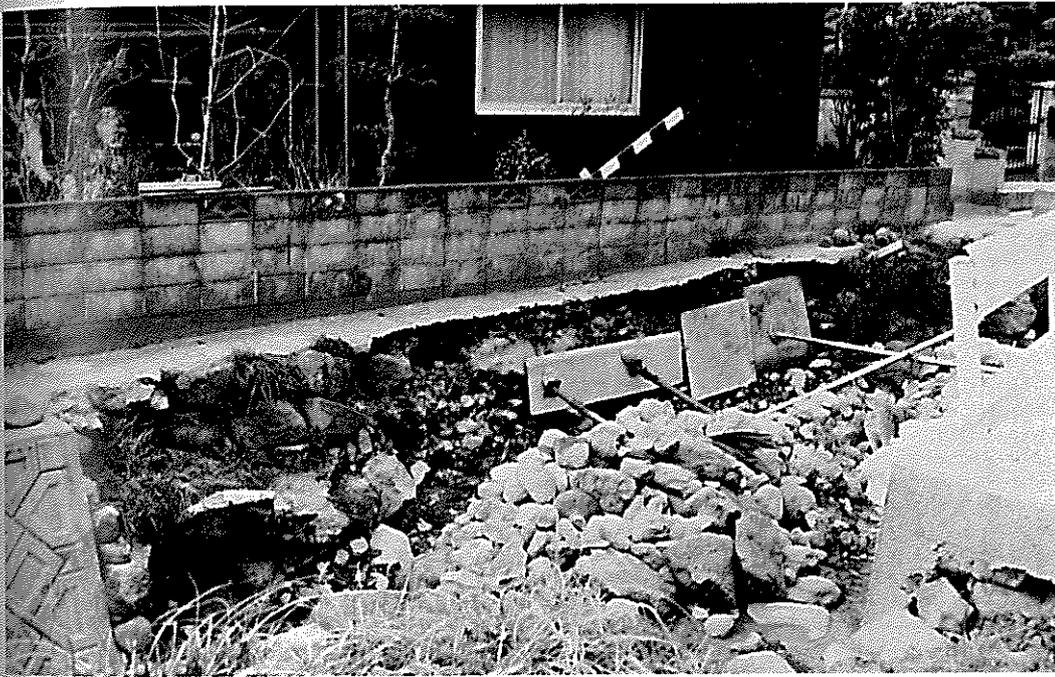
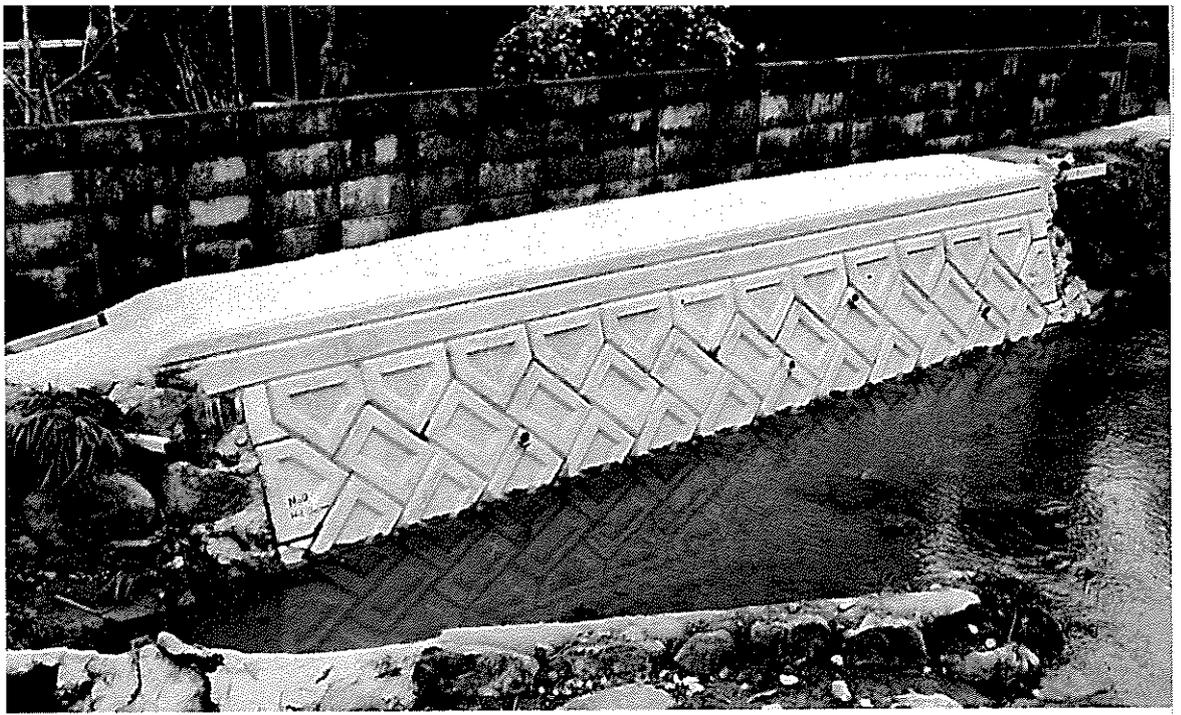
濁流で流失、大きく崩れた県道(本木)



山崩れで大量の土砂、樹木が宅地に流入。
(道ノ尾)

嬉
里

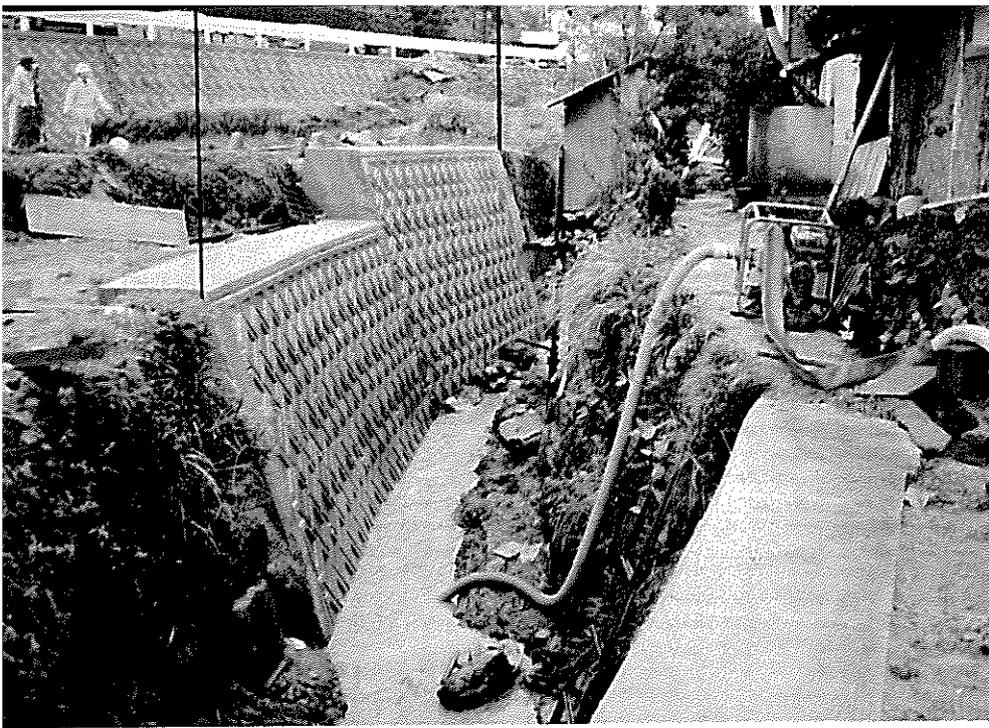
復旧



濁流で川岸をえぐられた。(嬉里谷川)



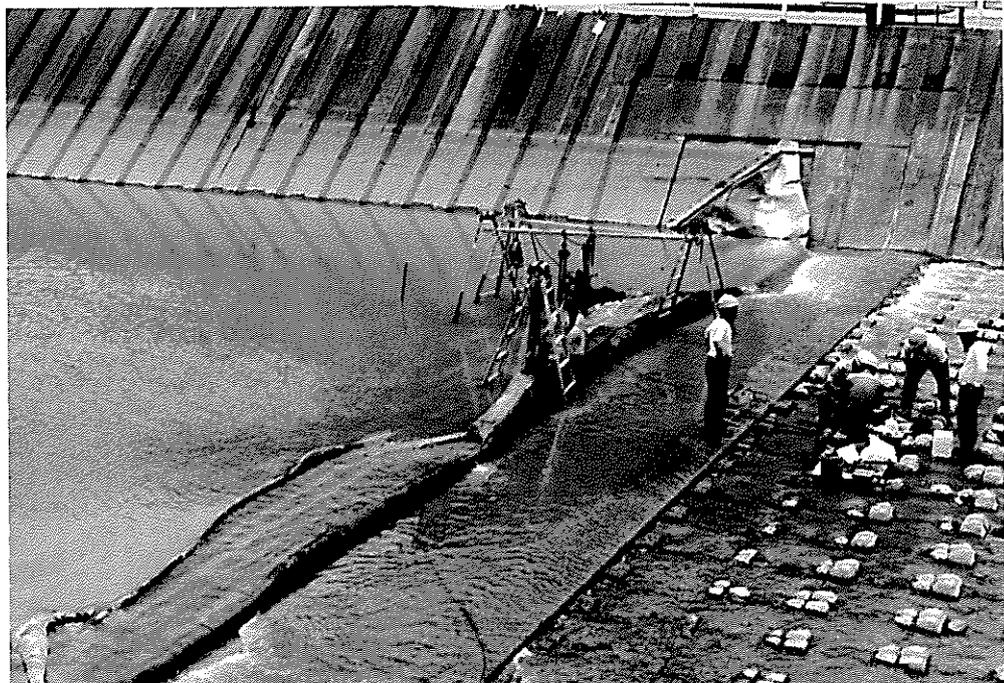
復旧(左写真)



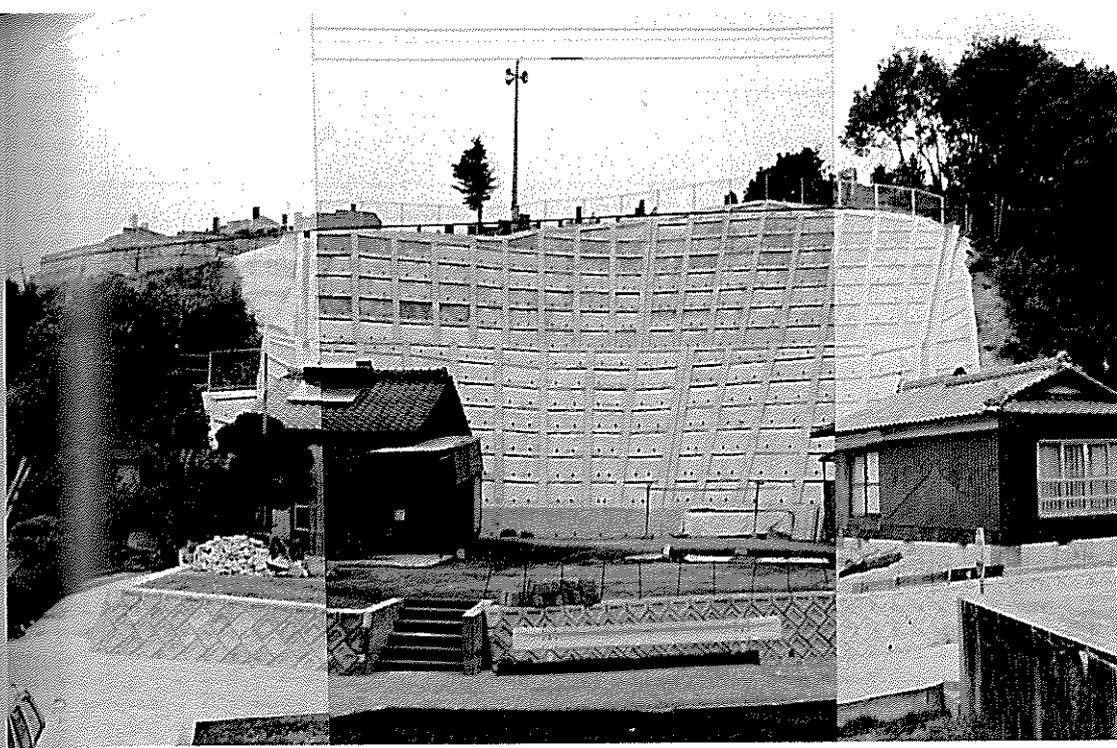
復旧



激流で川岸をえぐられ農地(水田)流失。
(嬭里谷川)



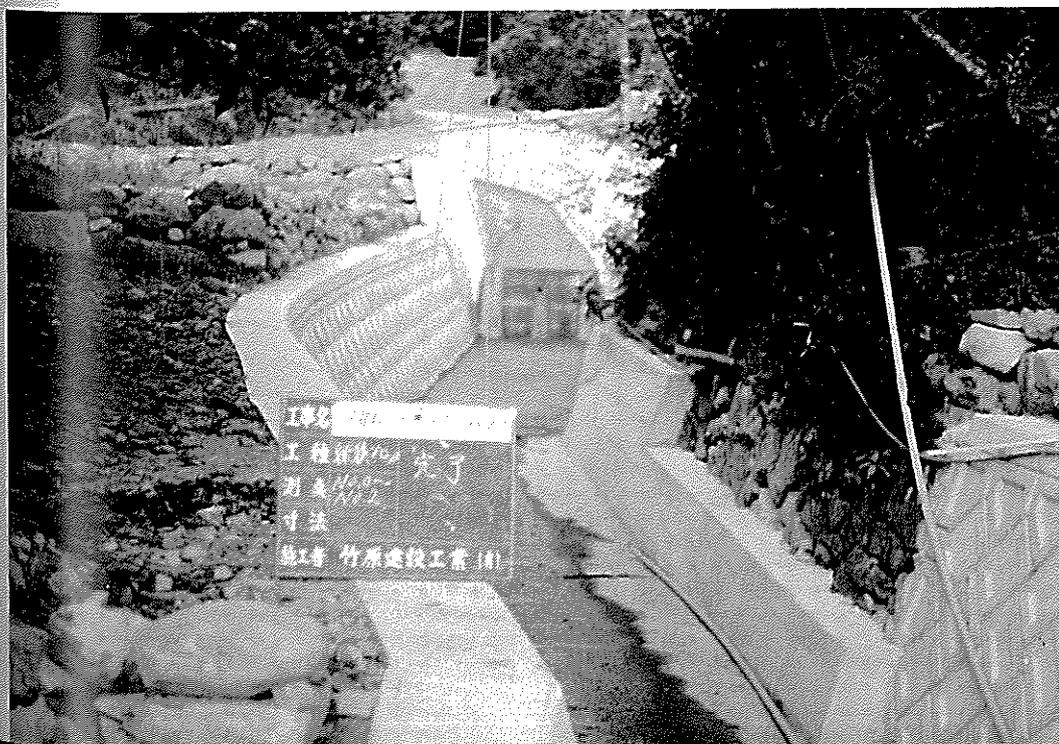
長与川フアリダム2カ所は流木などで損壊。
(嬭里郷寿屋長与店横)



復旧 緊急急傾斜地崩壊対策事業



裏山のがけ崩れて一家四人家の下敷に。
(丸田谷)



復旧 (丸田谷水路) (左写真)

工事名 丸田谷水路
工種 土木
別名 丸田谷水路
寸法
施工者 竹原建設工業(株)

復旧



濁流で決壊。町道丸田谷線、丸田三菱アパート前

激流で水路は岩山に。(丸田谷)



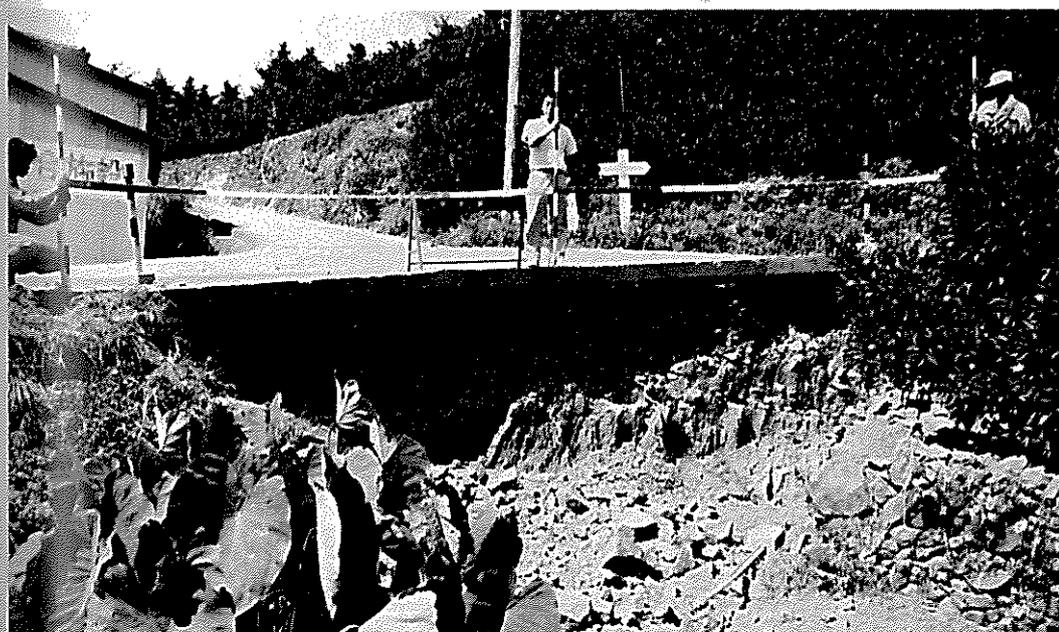


復旧

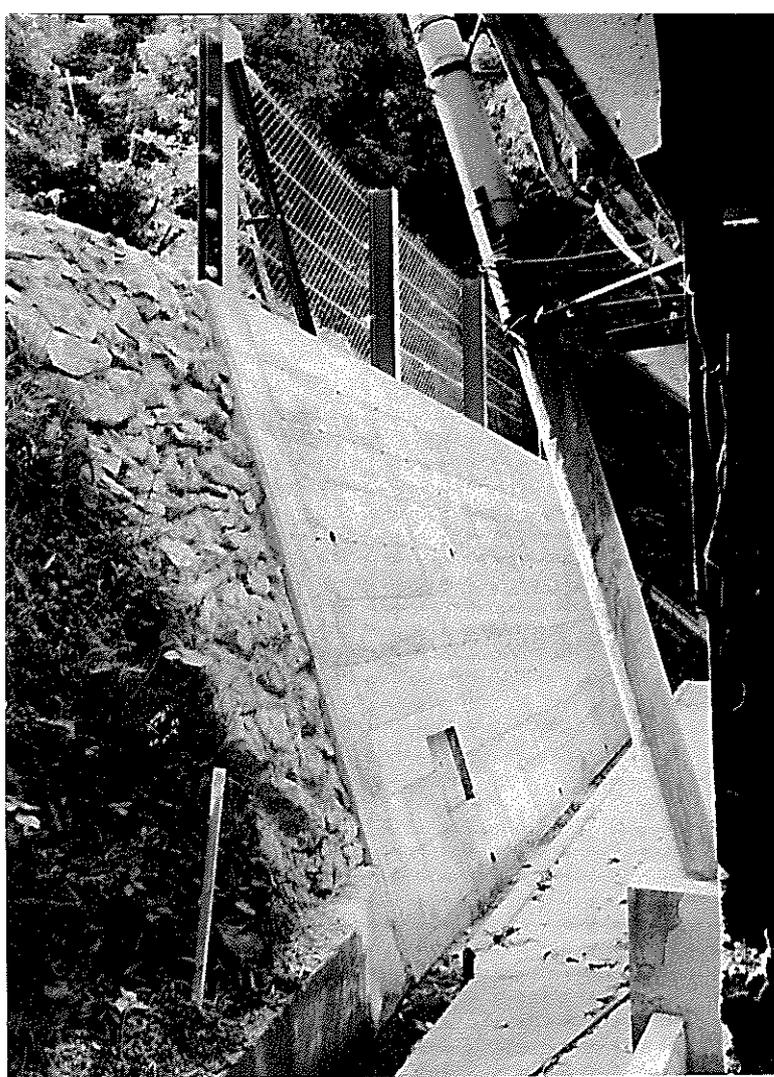
齊藤



川岸が決壊(船津)



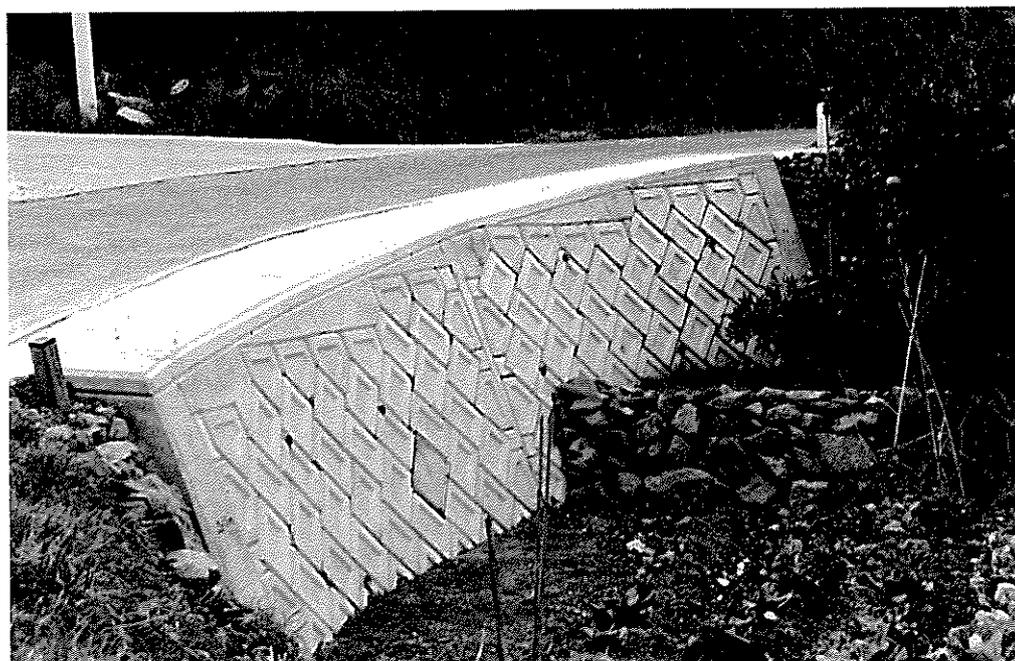
激流は道路をえぐった。町道齊藤崎ノ尾線(毛屋白津)



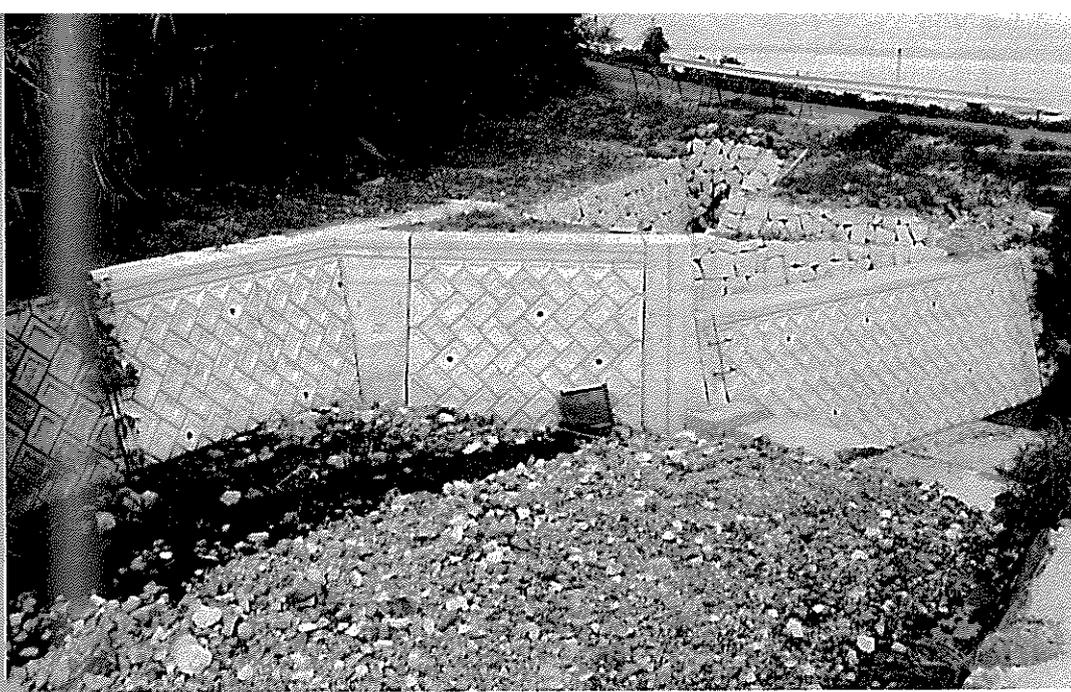
復旧 林地崩壊防止事業



裏山の山崩れが住家を直撃。かろうじて家族は避難(上齊藤)



復旧(右写真)



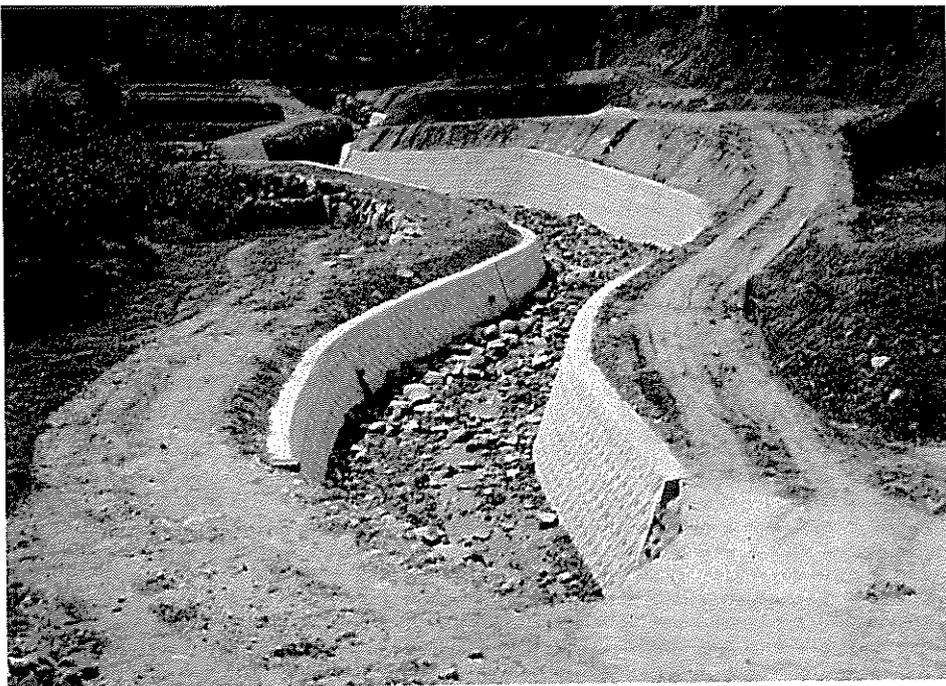
復旧



激流で決壊(大堂川)



復旧(堂崎・国道207号線)(左写真)



復旧



水路決壊(中通り)



多良見町へ通じる国道207号線が堂崎で決壊、
不通。道路の上部からの地すべりは下の海まで達
した。(堂崎)

7・23長崎大水害

復旧工事完了

一、応急復旧・救援活動

七月二十三日夕刻から深夜にかけて、長崎地方を襲った集中豪雨は、長与町において、わが国観測史上最高の一時間降水量一八七ミリという驚異的記録を残し、六人の尊い人命と、住宅、河川、道路、農地など被害の総額は、九十億円余の膨大な額に達した。

町では、災害対策本部を役場に即刻設置し、避難・応急復旧作業を行い、町内外からは温かい救援活動の手が差しのべられた。(五十八年二月発行「一八七ミリの脅威・7・23長崎大水害記録集」に内容掲載)。

二、災害復旧班を編成、対応

大災害を蒙った長与町などの被災地は、翌七月二十四日、災害救助法の適用を受け、また、中小企業被害が八月二十日、公共土木施設・農地等被害が九月十八日、激甚災害の指定を受け、復旧がなされた。

災害対策本部では、町機構の各部課で災害復旧班を編成、対応した。(一八七

ミリの脅威・7・23長崎大水害記録集」に内容掲載)。

最後まで残った農林関係と公共土木の災害復旧係の対応は次の通りであった。

農林関係

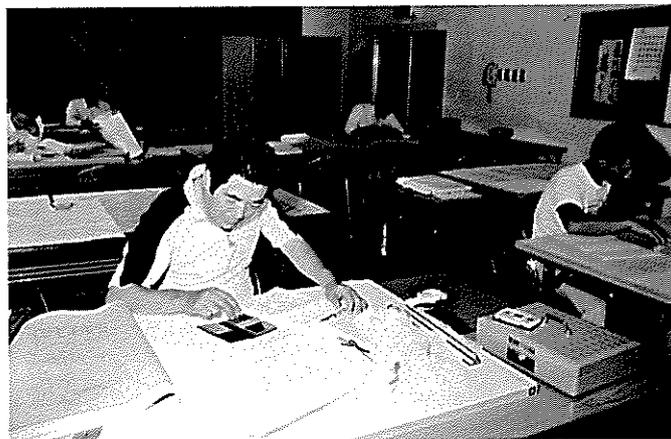
農林関係復旧は、建設部経済課が担当対応した。被害が余りにも大きく、町では、経済課に農林関係の災害復旧係を新設し、職員三名を配置、他部課から三名人事異動して増員、対応した。

実地測量と査定、実施設計書づくりは、当初、上長与地区公民館を本部・宿泊所に当て、二階会議室を利用して作成したが、五十八年一月九日から、五十九年九月三十日までの一年八カ月間、長与小学校のプレハブ旧校舎に対策室を設け、査定、実施設計書づくりなどに務めた。

また、五十七年八月始めから長崎県、県下市町、土地改良事業団および県外の島根、鳥取県から五十四人、延べ一、二九人の派遣職員の応援を受けた。

災害対策室での人員態勢は、別表「農林関係災害対策室での人員態勢状況」の通りであるが、延べ従事者数は、職員が二、二四六人、委託設計業者は一、九四

八人の上っている。



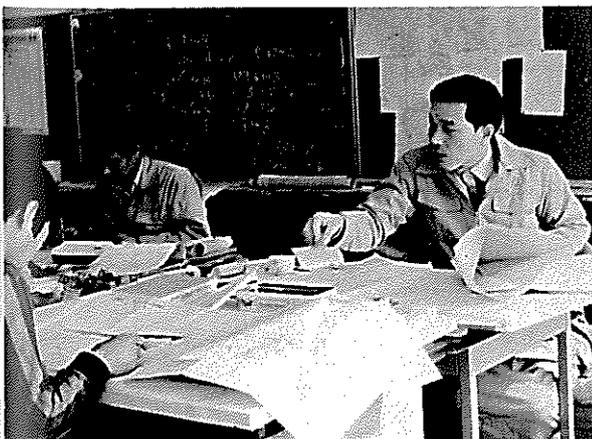
深夜まで続く設計書づくり——
57年いっぱい対策本部となった上長与地区公民館会議室。

職員増をはかっていた対策室であったが、膨大な被害個所の復旧工事の設計書作成に対応するためには、平日の時間外勤務や日、祭日の出勤など多忙をきわめた。

また、測量、設計作業で寝泊りする時ふとんなどの準備や毎日の食事をどうするかなど、仕事を始める前の準備が大変だった。

農林関係災害対策室での人員態勢状況

	平常時	最多時	延べ
職員	3人	4人	2,246人
応援派遣職員	6	7	1,229
アルバイト(パート)	2	3	1,479
設計業者	2	8(7社)	1,948



応援派遣職員

公共土木関係

公共土木関係復旧は建設部建設課で担当、対応した。災害復旧工事を進めるに当たっての査定、実施設計書づくりには人事異動で二名の増員をはかり、係員四名を配置、災害復旧係を設置対応した。実地測量と査定、実施設計書作成業務は、当初勤労青少年ホームで行っていたが、五十八年二月一日から五十九年九月三十日までの一年七カ月の間、長与小学校プレハブ旧校舎に対策室を設け業務に務めた。



58年1月まで対策本部を設置した勤労青少年ホーム(音楽室)

公共土木関係災害対策室での人員態勢状況

	平常時	最多時	延べ
職員	4人	7人	3,840人
応援派遣職員	2	2	298
アルバイト(パート)	3	3	1,800
委託設計業者	3	15	1,620

また、五十七年八月始めから、長崎県や県下市町から十一人、延べ二九八人の派遣職員の応援を受けた。災害対策室での人員態勢は、別表「公共土木関係災害対策室での人員態勢状況」の通りであるが延べ従事者数は、職員が三、八四〇人、委託設計業者は一、六二〇人に上っている。農林関係と同じく、職員増をはかっている対策室であったが、膨大な被害個所復旧の設計書作成に対応するためには、平日の時間外勤務や日・祭日の出勤など多忙をきわめた。特に、査定時は、夜を徹しての設計書づくりもあった。

三、災害査定と復旧

国・県の災害査定は、農林関係が九次、公共土木関係が五次に亘って行われ、その査定に基づいて実施設計が生まれ、農林関係は五十七、五十九年度の三カ年度で、公共土木関係は町単独事業を除いて、五十七、五十八年度の二カ年度で復旧工事は完成した。

その実施個所数と工事額は、農林関係が四百七十九カ所、十五億九千三百六十六万六千円、公共土木関係は補助対象が二百六十二カ所、八億一千六百八十三万三千円、町単独事業百二カ所、九千九十万四千円となっている。

平木場川については、災害の現状を踏まえ、災害関連事業として認可を得て、千六百六十メートルの改良復旧事業が実施され、在来河川が大幅改良された。

また、緊急急傾斜地崩壊対策事業(事業主体、県)として、町内で十二カ所、総事業費三億六千六百二十万円が、急傾斜地崩壊対策事業(事業主体、町)で七カ所、総事業費六千八百四十万円が施行された。なお、六十年年度急傾斜地崩壊対策事業(事業主体、町)として六カ所、総事業費五千九百万円が現在施行中である。

農林関係四百七十九カ所、公共土木関係二百六十二カ所(町単独事業除く)の工事施行には、工事請負業者が農林関係

災害復旧工事現場を視察する吉田町長ほか町関係職員ら。(58・6・15)



二十九社、公共土木関係三十五社が参加町内、長崎市業者のみならず、福岡県からの四社も受注した。また、工事施行には、下請業者が五島なども含み、九州各地から集まった。

57年災(7・23大水害)
農林関係災害復旧の地区別実施状況

(単位:千円)

	農 地		農 業 用 施 設		合 計	
	カ 所	実 施 額	カ 所	実 施 額	カ 所	実 施 額
本 川 内	16	11,569	111	228,335	125	239,904
平 木 場	21	19,894	69	526,390	85	546,284
三 根	18	19,165	17	118,114	35	137,279
吉 無 田	11	8,430	13	164,990	23	173,420
高 田	17	17,316	43	53,332	55	70,648
丸 田	8	7,718	43	136,516	51	144,234
嬉 里	2	1,346	14	33,563	16	34,909
斎 藤	3	4,077	12	17,664	15	21,741
岡	10	10,564	64	214,683	74	225,247
合 計	106	100,079	386	1,493,587	479	1,593,666

57年災(7・23大水害)
公共土木施設災害復旧の地区別実施状況(補助対象事業)

(単位:千円)

	河 川		道 路		橋 梁		合 計	
	カ 所	実 施 額	カ 所	実 施 額	カ 所	実 施 額	カ 所	実 施 額
本 川 内	16	28,581	10	7,707	2	5,980	28	42,268
平 木 場	7	235,108	8	10,730	2	391	17	246,229
三 根	3	20,496	1	2,023			4	22,519
吉 無 田	7	40,677	10	15,648	1	3,759	18	60,084
高 田	30	74,263	64	151,640	1	2,698	95	228,601
丸 田	15	28,009	6	9,662			21	37,671
嬉 里	7	11,131	2	2,662			9	13,793
斎 藤	1	1,169	6	3,886			7	5,055
岡	32	113,461	31	47,152			63	160,613
合 計	118	552,895	138	251,110	6	12,828	262	816,833

57年災(7・23大水害)
公共土木施設災害復旧の地区別実施状況(町単独事業)

(単位:千円)

	河 川		道 路		橋 梁		合 計	
	カ所	実施額	カ所	実施額	カ所	実施額	カ所	実施額
本 川 内	4	1,020	2	553	2	887	8	2,460
平 木 場			1	4,375			1	4,375
三 根	2	410	5	607	1	136	8	1,153
吉 無 田	4	2,961	12	16,275	1	470	17	19,706
高 田	7	6,770	23	35,332	1	354	31	42,456
丸 田	6	1,495	7	1,453			13	2,948
嬉 里	4	975	3	4,080			7	5,055
斉 藤			1	740			1	740
岡	11	10,344	5	1,667			16	12,011
合 計	38	23,975	59	65,082	5	1,847	102	90,904

57～59年度
(緊急)急傾斜地崩壊対策事業実施状況

(単位:千円)

地 区 名	事業主体	自治会名	57年度事業費	58年度事業費	59年度事業費	事 業 費 計
平 木 場 (1)	県	下 平	25,600			25,600
平 木 場 (2)	"	上 平	14,500			14,500
平 木 場 (3)	"	"	28,600			28,600
高 田 (1)	"	西 高 田	28,600			28,600
高 田 (2)	"	"	17,600			17,600
高 田 (3)	"	道ノ尾	18,400			18,400
三 根	"	三 根	17,900			17,900
丸 田	"	丸 田 谷	17,500			17,500
斉 藤	"	毛屋白津	15,600			15,600
嬉 里	"	皆 前	47,500	45,000		92,500
吉 無 田 (2)	"	辻 後	39,400			39,400
高 田	"	道ノ尾		50,000		50,000
吉 無 田 (1)	町	辻 後		10,000	10,000	20,000
吉 無 田 (2)	"	"			9,000	9,000
吉 無 田 (3)	"	"			4,400	4,400
西 高 田 (1)	"	西 高 田			10,000	10,000
西 高 田 (2)	"	"			10,000	10,000
西 高 田 (3)	"	"			10,000	10,000
斉 藤	"	毛屋白津			5,000	5,000
(県)計12カ所			271,200	95,000		366,200
(町)計7カ所				10,000	58,400	68,400
合計 19カ所			271,200	105,000	58,400	434,600

60年度施行中
急傾斜地崩壊対策事業実施状況

(単位：千円)

地区名	事業主体	自治会名	60年度事業費	60年度までの全体事業費
西高田(1)	町	西高田	9,000	19,000
西高田(2)	"	"	10,000	20,000
西高田(3)	"	"	10,000	20,000
斉藤	"	毛屋白津	10,000	15,000
吉無田(4)	"	池山	10,000	10,000
平木場	"	上平	10,000	10,000
計6カ所			59,000	94,000

長与川河川復旧に

一億五千万円

町内県管理公共土木施設では、駅前橋附近の長与川河川決壊など甚大な被害を受けた。県(長崎土木事務所)で復旧事業がなされ、次の通りの施行状況であった。

57年災(7・23大水害)
町内県管理公共土木施設実施状況

(単位：千円)

区分	カ所	実施額
長与川(二級河川)	25	154,942
高田川(二級河川)	15	59,771
南田川内川(二級河川)	6	15,252
県道長崎多良見線	6	15,072
県道東長崎長与線	7	27,076
国道207号線	10	73,299
計	69	345,412

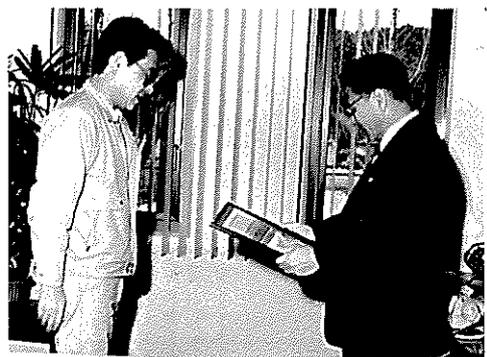
対策室余話

◇膨大な被災地にあ然。終わった(復旧完成した)今、「ようやくやったナ」。正直言って、最初は、どうなることか。

◇被災後、農林(経済課)は上長与地区公民館の会議室、研修室(寝泊まり)で、公共土木(建設課)は勤労青少年ホームの音楽室、会議室、娯楽談話室(寝泊まり)で設計書づくりをしたが、毎日の食事、ふとんなどの準備が大変だった。応援派遣職員を多く抱えた上長与地区公民館では、炊事のおばさん二人を雇って朝、昼、晩の食事をつくってもらって、復旧作業に専念できた。日夜の激務の疲労回復にと、時々スタミナ食も。

◇深夜までの仕事が終わって就寝し、大きいびきを誇る派遣職員のおさんを離れて、同じ派遣職員のおさん、ふとんを抱えて別室へ。それでも、フロアをこぐまするいびきの音。

◇七月二十六日、平木場川で大きなスッポンを捕まえた。疲れた体を癒いやすと、割ぼう、料理店数店に調理を問い合わせたが、災害で水が出ない、料理をしきらない、とかでN君の池に入れていたが、かわいそうになって元の平木場川に放してやった。食べられていたところだったスッポンくん。今頃どうしているかな。



災害復旧応援ありがとう。
応援派遣職員に吉田町長から感謝状が贈られた。

◇わが家は寝に帰るだけ。子供と顔を合わせられない。午前二時〜三時と連夜の残業が続くなか、いろいろなエピソードが生まれた。

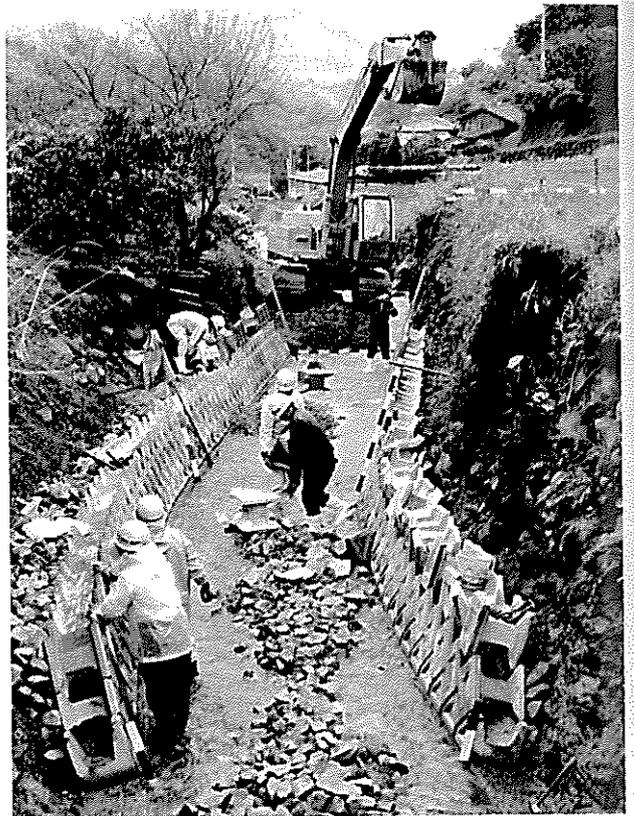
S君の話。妻がお産で実家に帰っていることと重なって、妻のおじさんS君宅にいつ電話しても通じない。おかししい。あらぬ疑い(異性問題)をかけられる羽目になったS君。事情が分かって大笑い。S君に「それはご苦労さん」。それだけ忙しかったとのこと。

◇県内のみか、遠く島根、鳥取などからも派遣職員の応援を受けた。多忙な復旧工事を通じて、異地の人たちとの心のふれあいがあった。心とけあい課の忘年会に来た人も。ありがたいございました全国のみかさん。



緊急急傾斜地崩壊対策事業
(58. 5. 30、嬉里郷皆前・20ページ復旧)

復旧は進む——
平木場郷隠川内川水路護岸工事
(58. 5. 25、30ページ復旧)



新鮮な野菜を手に収穫の喜びの木岡さんら。

7・23長崎大水害は町内に
大きな被害を残しましたが、
主の好意で近所の人たちに開
放、親と子の菜園
づくりに喜ばれて
います。

親子、近所のふれあいに一役

水害跡地で野菜づくり

みんなの
ひろ場

広報ながよ
58年8月号から

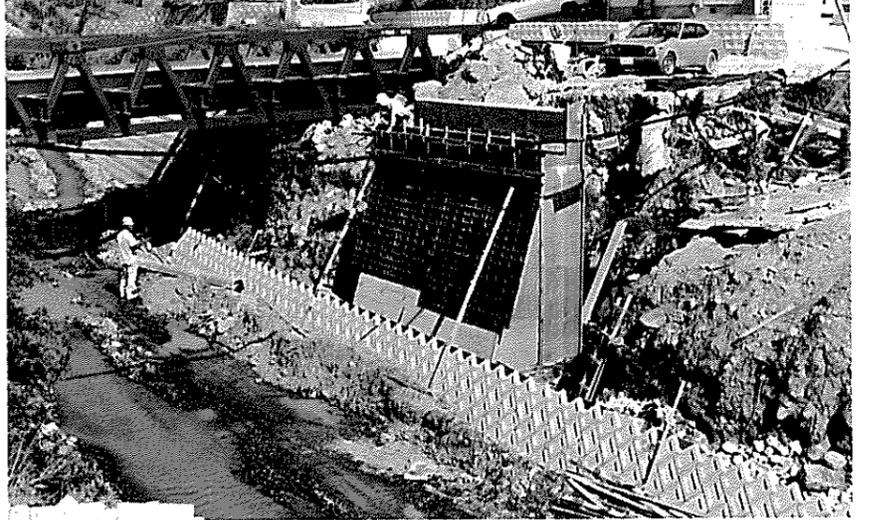
農地は三根郷下
洗切橋下流の水田
7・23大水害時、
上流から土砂、石
ころ、樹木、ガラ
スなどが大量に流
入してきて堆積、
地主の平木場郷下
平の堤光夫さん
(全宅は、ユンボ、
ダンプなどを入れ
整地しましたが、
今年水田とするこ
とを断念しました。
そこで、近くの
人たちに、「野菜
でも作ってみては」
と話しかけたとこ
ろ、堤さんの好意に木岡洋祐
さん(同)、池田正春さん(同)
ほか四戸が野菜づくりを始め
ました。もちろん、みんな農
業は初めて。水田二枚、約二
〇アールには各戸思い／＼に
キュウリ、ナスビ、カボチャ、
トマト、ピーマン、メロン、
スイカなどが作られています。
見よう見真ねで野菜づくり
をしていると、近くの農家の
人が肥料の施し方、作物の作
り方を教えるにやまありません。
初めて野菜づくりを経験、
土と親しみ、自分の手で作っ
た物を食べられる喜びを味わ
いましたが、農家の苦勞もわ
かりました。

水害が生んだ菜園づくり。
おかげで、近所同志や農家と、
親しく話し合えることになり、
コミュニティづくりにも役
立っています。木岡さんは「家
族で共通の話題をつくりたい
と参加しました。子どもたち
と一緒に土と親しみ、話し合
いの場となつてよかった。私
は宮農日誌をつけて、貴重な
野菜づくりを体験しています」と
話していました。

貴重な野菜づくり体験と仲
間づくりの場を提供してい
ただいた堤さん。この農地は、
来年度整地して水田に復旧す
る予定です。



平木場川護岸復旧



山田橋架け替え

あの水害も塞翁が馬 流速にも注意しよう

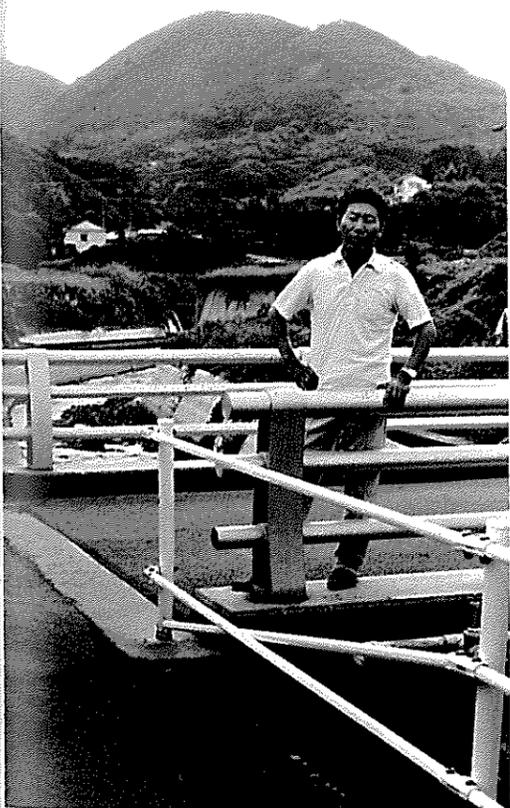
溝上 博 (上平・47)

昭和五十七年七月二十三日の長崎大水害は私たちに自然災害の計り知れぬ力量を眼の当たりに見せ付けられた。翌朝、戸外の目に入る光景に、ただ、ただ茫然と立ち尽くし、そして座りこんでしまった。近所の家、みかん畑、水田と見回ってその災害の凄まじさに口もきけなくなつた。川も道路もその姿はどこにあつたのか全く見当も付かない。目に見えるのは石、石、それも土や小さい石は下流へ押し流され残つたものは数トンもある大石ばかりである。昔から幾度かの災害にもめげず自力で復旧し農地を守つてきているのに、今度はかなりはとも手に負えない大水害である。運よく残つた水田や畑も用水溝や川がなくて水田の機能を果たさず、道路のない畑は耕作もみかんの取り入れも出来ない。もう農業も出来ないと思うと、情けなくなつて涙が出て来た。

道路が出来上がり、農作業の苦勞を無にする事なく秋の収穫が出来ました。あの時の有難きは生涯忘れえぬ喜びでした。また、本復旧のための町の方の説明会やクイ打ちなど、着々と進む復旧計画に一時は災害のダメージで生気を失つていた私達にも一筋の光明として期待をし、本復旧完成を心待ちしながら被災者として協力できる事はして行かねば、と思ひました。おかげさまで関係者の昼夜を徹してのご尽力で、河川も道路も橋梁も景観美しく、再び水害は起きないであろう

と思われる立派な工事が完成し、水にののく事のない毎日が過ごせる日がやって来たのです。しかし災害は忘れた頃にやってくる、と言われます。その後、防災知識の普及に力が入られておりますので、非常時に備えた知識をより多く吸収しておく事が防災上一番重要と考えます。災害から一段落して上流の山に登って見ますと、地滑りと同時に多くの大木が流出し、途中で立木や大石に引っかけたり、それに土砂が目詰まりし、一時期湖水の状態になり、立木や大石がその水圧に堪えられなくなつて一度に何百何千トンの水が流れ下つた様子がうかがわれます。濁流や橋を渡つたり、川の傍を通る時など万全の態勢と注意が肝要なる所以といえます。避けられぬ災害から被災を最少限に押える努力に心掛けたいと思ひます。

秋の収穫を目前にして水稲も穂が出ずみかんもひよ鳥のエサかと思つとこれまでの手入れが無になつてしまふ。何んとかならぬかと思案する内、役場の方からも次々と救援の手を打つていただき、仮設農道建設や水田には揚水ポンプの貸し出し等をしていただく事になり、大石とブルドーザーの四ツ相撲で何かが通れる



架け替えられた山田橋に寄り添い、感慨深げの溝上さん。

温かい励ましで 家屋再建

荒木愛子(辻後・43)

7・23長崎大水害から早くも三年が過ぎた。ついこの前のように記憶に新しく、忘れようとしても忘れられない体験であつた。長く降り続いてきた雨が、その日の夕方から急に雨足がひどくなり、七時から八時頃には最高の降り方だつた。日頃から裏山が危険だとは思つていた。まさか崩れるとは思ひもなかったが、万一のためにと主人のお位牌と貴重品を持ち、すぐに逃げ出せる様にと、用意だけはしていた。相変らずひどい降りである。十時頃に消防団の方が来られて、すぐ避難してくださいといわれ、私たちはすぐに近所の家に避難させていただいた。十一時を少し回つた頃、隣家の奥さんの「崖がくずれ、皆んな逃げて」という叫び声が聞こえて、その家から飛び出し、下の方へ逃げようとして、ふと振り向くと、すごい音と共に崖がくずれてきて、家がまるで映画のスローモーションの一場面を見ているように、ゆっくりと倒れていった。そして火花がパチパチと音をたててあがつた。家が崩れた。私は呆然と立ちすくみ、しばらくすると体が震えて来た。子供が「お母さん」と叫んでしがみついて来た。私は母と子供たちを両脇に抱えて、大丈夫、大丈夫とつぶやいていた。翌日から近所の方々の

温かい応援と励ましを受け、親戚の家に寄宿させてもらい、家の後片づけと、役場へ復旧のお願いに日参した。二十日ほどして県の仮設住宅に入居した。二年の期限付きでその間に家の再建を考えねばならなかつた。跡地が使用不可能になつたため、土地さがしからしなければならなかつた。



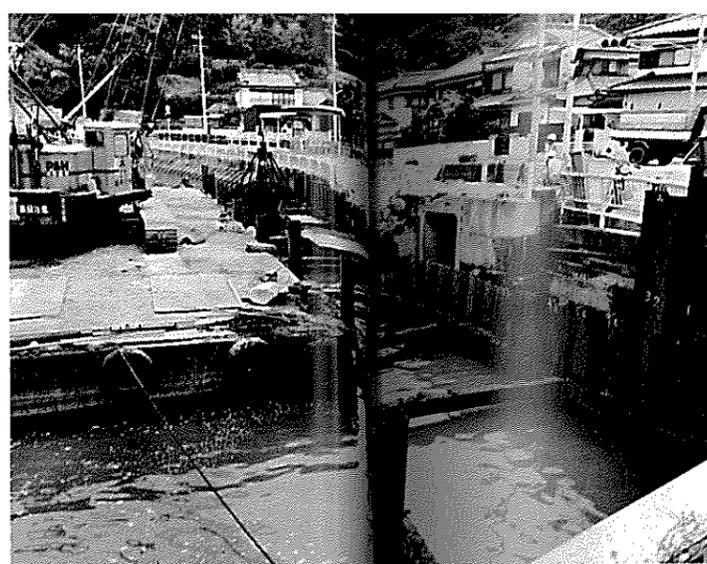
わが家が倒壊した跡地に立って——荒木さん。後ろが吉無田郷辻後地区緊急傾斜地崩壊対策事業施行地。

幸いにも町内に見つかり、家の建設が出来た。災害を受けた苦しみ、悲しみもこれで払拭出来たように思う。避難してなかったらと思うとゾッとするのである。この事から、町では危険箇所を完全にチェックし気象状況を把握して早めに避難情報を出してもらいたいと思う。わが辻後地区では全壊、半壊家屋、床上下浸水家屋、崩壊地等、被害がかなり大きかつたため、町の呼びかけにより早速自主防災組織が結成され、五月に防災組織災害訓練が行われた。被害を目の

当たりに見て防災の必要性を切実に感じられたことと思う。私もこの経験を無駄にしないように、日頃から災害に対する注意を怠らず、常に心の準備をしておくかなければと思つている。そのためには自主防災組織災害訓練はぜひ定期的に行つてほしいと思ひます。最後に誌上をお借りして町・役場の方々のご尽力に感謝し、そして、ご厚意と励ましをお寄せくださった皆様方に厚くお礼申し上げます。



長与川復旧(吉無田、駅前橋附近)



長与川復旧(船津橋下流右岸)



長与川復旧(船津橋上流右岸)

言い尽くすことのできない 復旧の苦労

谷口 勇 作(横平・62)

夕方から降り続いた雨は増々強くなり
私たちは家にとじこもったまま、「えらい降るな——」つと言いながら寝ころんでいました。雨は恐ろしいほど強くなり、一歩も外へは出られません。しばらくしたら隣の人が、「この貯蔵庫は二棟共なかごたるヨ」と言われ、始めはピンと頭に来ませんでした。家の流れるような大きな川はなく全くの安全地帯だったからです。

夜が明けて明るくなったので出て見ると、四十年余りのミカンの大樹は根こげして押し流され、大きな岩と共に高い山から川を作って下り、堤の中に入り山をつくっていました。二棟の貯蔵庫と、ミカン山にとりつけたモノレールも押し流され、無残な姿を見せています。お見舞いに来ていただいた人たちもただ驚きの声ばかりでした。応急復旧で、押し流された二棟の貯蔵庫の解体作業に町消防団第七分団のみなさんが、復旧作業に努めてもらいました。本当にありがとうございます。

復旧工事の手始めとして、親せきの人を加勢してもらい、岩割りから始めました。まるで石切場でも出来たようでした。日がたつにつれ、気ばかりあせり無理なこととなりながら再々、役場にもお願いして復旧工事が始まり、大きな重機が入



完成した土止め擁壁をバックに谷口さん。バックの貯蔵庫も建て直した。

って来ました。先づ、道路づくりから始まりましたが、せつかく高接して、きれいなミカンがようやくなりかけた矢先、木を切らねば道路が出来ず大変残念でした。みるみるうちに重機は頂上まで上って行きました。工事が始まると毎日天気が悪く、登ったり下ったりが大変でした。道具を上げたり、コンクリートを上げた道なき所の不便をつくづく感じました。不向きもあって暑いうちからミカンの収穫時になって来ました。道なしではミカンが運べません。気が焦ります。私も朝に晩に道路の仕上げに一生けん命働

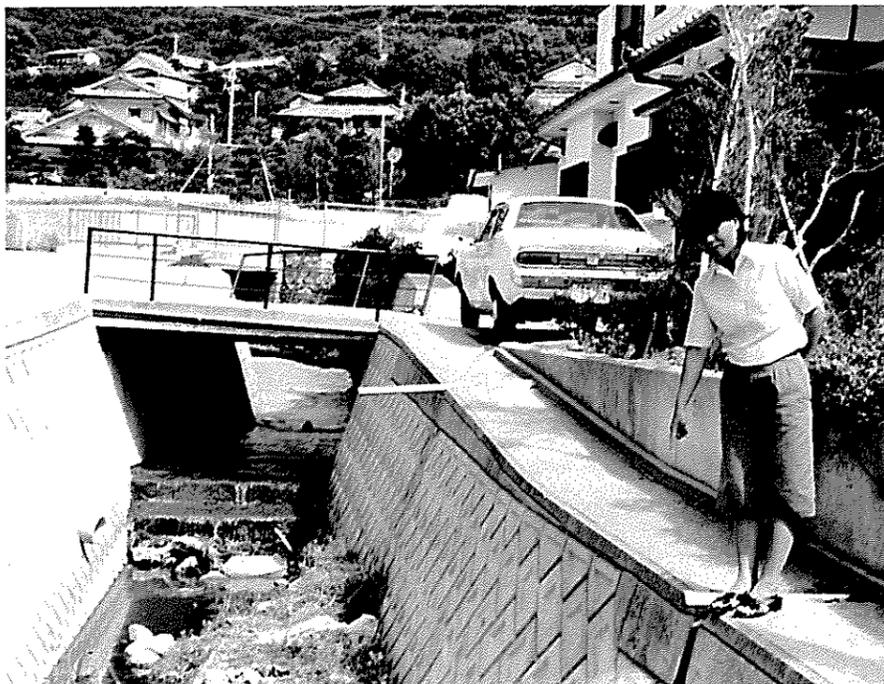
きました。
水害後のみんなの苦労は一言二言では書き尽くす事は出来ません。町長さんを始め皆様方のご支援を受けまして、立派に工事も出来ました。有難うございました。途中までですけれども、道路も広くなり、きれいに舗装までして頂いて惜しかったミカンのことも忘れて喜んでおります。ただ、道路は広く、舗装はされましたが、災害ですから完全に元には戻ってはいません。上の方は、表土が流れてしまつて畑にならないし、天気の日でも石ころがコロコロ転がって来るような場所もあって、大雨の時は心配です。それにしても、今度の災害はいろいろなことを教えてくれ、学びました。今後の教訓として役立てたいと思います。

備えあれば 憂いなし

高田 悦子(岡中央・37)

五十七年七月二十三日、当時私の家の周りには田圃とみかん畑、裏には小さな川と五メートルくらい離れて海があり、隣家もまた十メートルほど離れていました。

その日は七時頃から風雨がひどく停電となり、気象状況を知りたくて慌ててラジオを出しましたが、電池がなくなつて役に立ちませんでした。状況を聞こうと思い知人へ電話しても通じず、私と子供三人は孤立状態となり、おろおろする私に子供も落ちつかずあとをついて回るので、少しでも落ちつかせようと思ひ横になると、二人はすぐに眠り静かになったが、川からは大きな石が水



激流で自宅裏の長峰川が決壊。復旧完成した護岸に立つ高田さん。

におし流される音が耳に響き大変不安でした。窓から外を見ると、自宅の橋に流水があたり噴水のように水しぶきをあげ、家に覆いかかり、周りも川となつてどんどん流れました。水がすぐにでも家へ入つて来そう得心配でしたが、どうすることもできずただじつと主人の帰りを待ち

ました。主人が帰宅したのは、十二時三十分頃でした。話を聞けば、茂里町でバスを降ろされたあと、十二時頃の満潮時までに自宅に着きたい一心で、水の中を悪戦苦闘の末「岡郷」まで歩いて来たと言ふ主人に頭が下がりました。翌朝外へ出て見たら河川はあちこちでえぐりとられ、大きな石がゴロゴロして、海へ通じる道は四メートル位にわたり土が全部流され、上のコンクリートが下へ落ちていました。被害があまりにも大きいのにびつくりしました。

道がなくなつたのには部落の人皆んなが不自由な思いをしました。また、河川の方も雨降りや特に梅雨の時期には、少しずつずれてゆく河川に日々不安でなりませんでしたが、翌五十八年に復旧工事が施行されて今では海へ通じる道も河川も、工事に関係された方々のおかげできれいに整備され、少々雨がひどく降つても安心です。ところで、この被害によって得た私の教訓としては「備えあれば憂いなし」と言う言葉通り、非常時に必要な品々を揃えておくこと、特に電池がなくて状況を知ることができなかったことが一番不自由でした。非常事態となつてあわてないよう、常に備えておくべきだと痛感しました。

災害に備えて

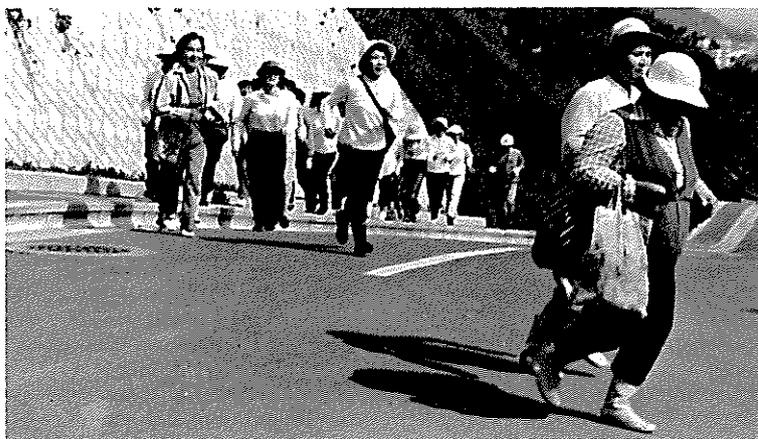
一、7・23の教訓生かせ

長与港で県総合防災訓練

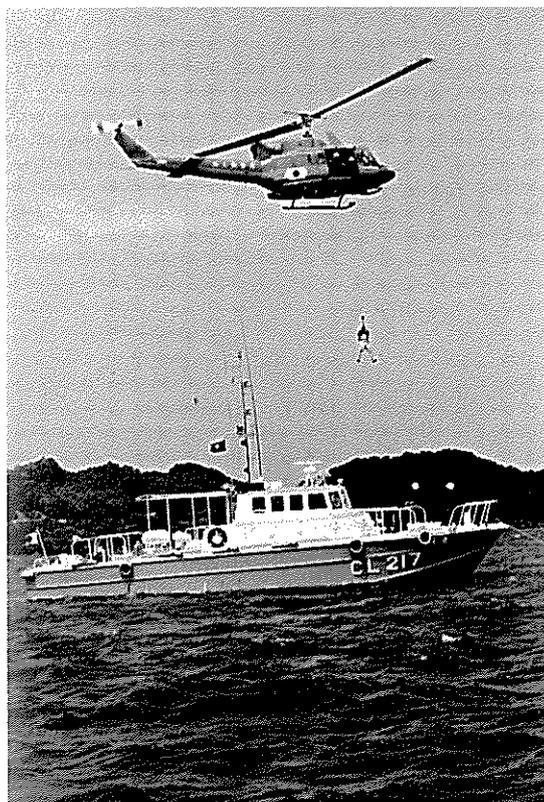
西彼長与町を中心に集中豪雨。山崩れ、河川のはんらんで多数の死傷者、行方不明者が出たもようとの想定で、五十八年五月二十五日、長与町岡郷、長与港埋立地で県総合防災訓練が行われた。関係者約千五百人が参加。ヘリコプター、セスナ、上陸用舟艇、巡視艇なども出動した大がかりな訓練だった。

同防災訓練は、各種災害発生に備えて、各防災関係機関相互の緊密な連携、協力のもとに、現実に即した災害対策の迅速かつ適切な活動が実施できるよう総合的な訓練を行い、有事即応の体制強化を期するとともに、広く県民に防災意識の高揚と普及を図るため行われたもの。

7・23長崎大水害一年目を迎えようとする時期、あの惨禍を二度と繰り返してはならないと、長与町消防団二百九十名が避難誘導、救出・救護、水防工法等の訓練を、長与町婦人会五十名が非常食の炊き出し、配給を、長与町自衛消防隊三隊六十名が初期消火（バケツリレー）と消火器による消火活動を行った。



集中豪雨発生——避難命令で第二中学校に避難
(吉無田郷辻後地区住民)



ヘリコプターによる負傷者救出
(海上保安庁)



土砂に埋まった乗用車を救助
(町消防団第六分団)



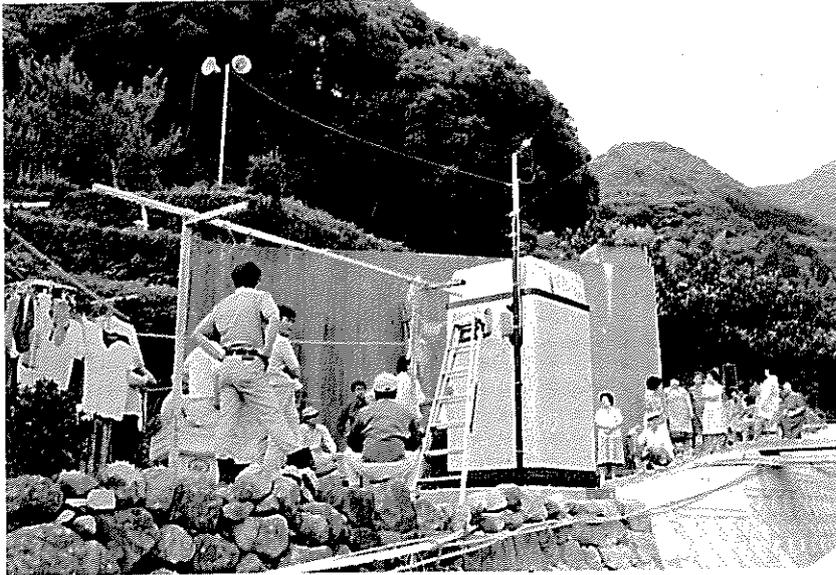
積土俵(町消防団第一・二分団)

二、丸田谷に「雨の見張り番」

土石流の予警報装置

丸田郷丸田谷に土石流の予警報装置が五十八年六月、設置された。

7・23長崎大水害は、県下に三百人近い尊い犠牲者を出すなど、各地で大きな被害を蒙ったが、犠牲者の大半が土石流



県が設置した土石流予警報装置(丸田谷)

やがけ崩れによるものだった。そこで、県では、全国にさきがけ開発されたばかりの「土石流予警報システム」を自主避難体制の一助にと県下十三カ所に設置した。

長与町には一カ所、丸田郷丸田谷の上杉福寿さん宅上に設置され、地域住民約五十世帯の「大雨の見張り番」を務めることになった。

丸田谷に設置されたのはT式で、一定の雨量に達すると地元の町消防団第八分団長宅と役場に「警戒雨量を越えましたので注意してください」と非常電話を通じて、音声で土石流発生の危険を知らせる。さらに、セットしている一定の雨量を越えると警報サイレンが作動して住民に避難を呼びかけることになっている。県は、地域住民に同装置の説明会を開いたが、地元、丸田谷自治会では、予警報装置を使って避難訓練を行い、災害に備えている。

7・23長崎大水害一周年防災講演会 (町老人福祉センター)



講演会には、約三百人の町民が参加、大水害で亡くなった犠牲者の霊に黙とうをささげてめい福を祈ったあと、吉田町長が、当時の被害状況と現在までの復旧状況を説明、災害のない町づくりに努力する、と誓った。

続いて「集中豪雨と斜面災害について」と題して、伊勢田哲也・長崎大学土木工学部教授の講演に耳を傾けた。

伊勢田教授は、講演のなかで、昨年の大水害の特徴として「かなりの事前降雨があったあととの集中豪雨だったため土石流の原因となった」と、災害地のスライドなどを使って、斜面災害に付きものの土石流の発生原因などを専門的な立場から指摘。参加者は、新ためて土石流の恐ろしさをかみしめていた。また、映画「7・23長崎大水害」「土石流」が上映され、一年前の「悪夢」の一夜を思い起こした。

会場前の廊下では、当時の被災、救援状況の生々しいカラー写真五十点を使った写真展も行われ、訪れた人たちが無残に押しつぶされたあの日の被災地の写真に見入っていた。

三、繰り返すなああの惨禍

一周年防災講演会

「悪夢」から一年。あの惨禍を二度と繰り返すまい——7・23長崎大水害一周年の五十八年七月二十三日、町老人福祉センターで防災講演会と大水害写真展が開

四、情報を広く、早く、正確に

移動系防災行政無線を設置

ながよぼうさいそうむ ながよぼうさい
いそうむ ながよぼうさいそうむ こち
らはながよぼうさい3(町建設課) ど
うぞ。

移動局(子局) 無線機20台

新しく導入した移動系防災行政無線の
電波管理局検査が六十年三月十五日終わ
って、この日から同無線の発信が始まり、
風水害などの災害予防、火災発生の際急
通報・消防団出動や、役場からのお知らせ
などに大いに利用されている。

町には、昭和五十年八月、九州で初め
て固定式の防災行政無線(同報無線)が
設置された。親局(役場)から発信され
た電波を各地区に設置している受信所

(子局)が受け、そのまま拡声装置によ
ってスピーカーを通じて拡声、通報され
るしくみになっている。当初五子局で始
まったのが今では三十二子局に増え、よ
り迅速で、正確な広報活動を進めてきた。

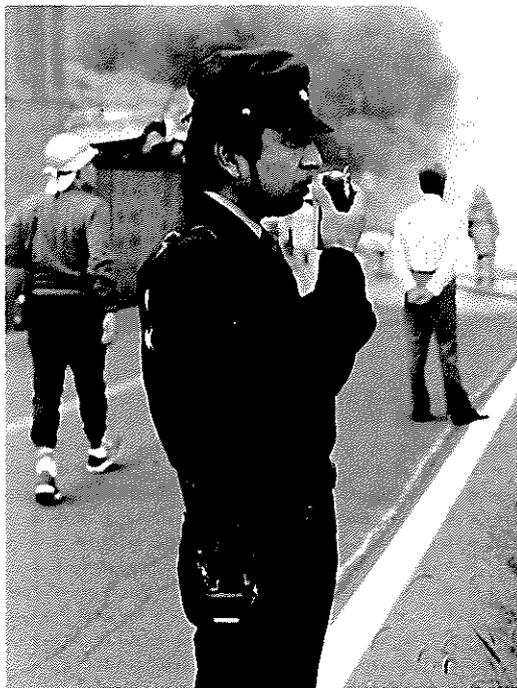
今回新設した移動系無線は、固定系
(同報無線)が親局からの「一方通行的」
情報伝達であったのを、町公用車、消防
車などの移動局からも情報の伝達、収
集をはかるうとするもの。災害時、移動局
を各地に配置して綿密な通信連絡をとっ
て、迅速な応急対策をとるとともに、日
常は町行政事務連絡に役立てる。

同無線の通信施設は、役場に四百メガ
ヘルツの基地局を置き、琴ノ尾岳頂上に
高さ十二メートルのアンテナを備えた中
継局を設置、移動局(子局)の車載用無
線機(町公用車)五台、車載携帯用無線
機(消防車)十台のほか、携帯用無線機
(役場総務課備付)五台を装備。出力は、
車載用、車載携帯用が十ワットで、携帯
用が一ワットとなっている。総事業費は
二千六百六十二万七千円。

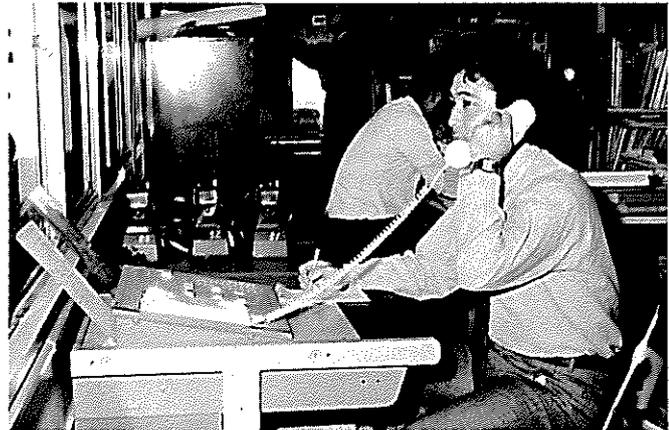
通信は、基地局(役場・遠隔子機)か
ら移動局、移動局から基地局、移動局か
ら移動局へと、どちらからでも自由に交
信できる。

非常時は、無線管理責任者の指示で
「統制」の状態に入る。この状態では、
呼び出しはすべて音声呼び出しで、災害対
策本部へ入る。各課へは災害対策本部か
らつなぐ。

また、広域共通通信もでき、周波数チ
ヤンネルの切り替えて、共同周波数に変
わって近隣市町との発信ができる。



災害(火災)現場で活躍する移動局・携帯
用無線機



基地局(役場総務課)



移動局・車載携帯用無線機
(消防本部と第一九分団の消防車に装備)

五、自主防災組織づくり

7・23長崎大水害が 教えたもの

自主防災組織をつくる必要性は、7・23長崎大水害が教えてくれた。

町では、即刻、災害対策本部を設置し、町民への避難誘導、家屋の倒壊などによる生き埋め者の救出、応急復旧作業などを行ったが、短時間に驚異的な降水量で二次災害の危険もあって、思うような組織機能が発揮できなかった。

そこで、教訓として残ったのが、町、消防団、警察などの防災活動以前の問題として、まず「自分たちの身は自分たちで守る」という意識をもって、積極的に行動することが必要である、ということだった。道路の寸断、電気通信の途絶などの状態では対策本部、消防団などの手は届かない。「自主的」に地域住民みんなが避難、誘導、救出活動などの活動を行わなければならない。

しかしながら、一人ひとりがバラバラに行っていたのではその効果が期待できないばかりか、むしろ、ひとりよがりの行動は危険な場合がある。そこで「住民が地域ごとに団結して、組織的に行動することによって初めて効果的な防災活動ができるわけで、これが「自主防災組織」である。

恐怖のあの時



自治会単位に

自主防災組織結成

町では自治会単位に自主防災組織をつくるため、六十年代始めの連合自治会総会で結成を呼びかけ、現在、辻後自治会を第一号に、本川内、嬉里中央自治会に結成された。

今、各自治会のなかで結成のため話し合いが行われているが、最終的に四十二自治会全部の結成をめざす。地域住民の自主性を尊重し、地域の実

情に応じた組織づくりが進められるが、育成は町と消防団が当たる。育成の内容は指導要綱に定められているが、まず、組織をつくることになっている。

自主防災組織（自治会）部長（副部長）の下に、総括班長（班）、情報部長（班）、消火班長（班）、救出・救護班長（班）、避難誘導班長（班）、給食・給水班長（班）の組織が必要である。

また、結成が認められると、設立、運営費が補助され、ヘルメット、サーチライト、ハンドマイク、救命箱、担架などの備品と、雨合羽、雨靴、ロープ、土のう袋などの消耗品が支給される。

7・23の教訓生かせ

辻後自主防災組織災害訓練

県南地域に低気圧が北上し、大雨洪水警報が発令され、洪水、がけ崩れの恐れあり。災害警戒本部は町消防団第四分団（吉無田）と辻後自主防災組織部長に対し、警戒体制を指示——との想定で、六年五月十九日（日）、辻後自主防災組織の災害訓練が行われた。

五地区で、子供百四十人、大人二百十人が避難集合、安全な避難経路で第二中学校と長崎北陽台高校教員住宅前公園へ避難した。

北消防署浜田出張所の野口重明所長から「がけ崩れなど災害発生時の恐れがある時は、テレビ、ラジオなどの気象情報に注意して、安全な場所に早目に避難してください」と避難の心がまえの話があった。

また、併せて、バケツリレーと消火器による初期消火訓練が行われた。



危険な時は早目に避難を——
（辻後自主防災組織訓練）

六、防災基金

町では、7・23長崎大水害を教訓として、各種防災施設の整備充実、それらの施設の維持管理、自主防災組織の育成強化を図るため六十年度から防災基金を設置した。

町の防災体制は、五十九年度、移動系防災行政無線を設置、町内各地の情報が迅速かつ的確に収集され、それを同報無線で町民にいち早く連絡、周知させることができることとなった。そこで、町民の方々には、自らの地域、財産は自らが守るという自主防災組織の結成を呼びかけ、結成後の組織の運営費や訓練の機器、機材などの経費に当てる。

また、防災組織の各班に災害に備えての消火器を設置している。

七、日頃の心がけが身を守る

いつ発生するかわからない災害。

“日頃の心がけが身を守る”

何よりも住民一人ひとりが、日頃から防災について深い認識と自覚をもって防災対策を行い、万一災害が発生した場合のことを想定して、避難経路、場所を知っておくことで被害を最少限にくい止めることができる。

あなたの地域でも自主防災組織づくりを——自治会長を中心にした組織化に協力して、災害のない安全な街づくりをはかろう。

繰り返すまい あの惨禍 7・23長崎大水害復興誌

昭和60年11月1日発行

発行 長崎県長与町

〒859-06

長崎県西彼杵郡長与町嬉里郷636

電話 0958(83)1111代表

編集 長与町総務部企画調整課

印刷 昭和堂印刷



復旧



石垣が大きく崩れ、足元をすくわれた住宅地(高田郷百合野第一団地)